

「新型コロナ」：洗脳・全体主義

——「馬鹿な戦争をやったもんだ」が繰り返されるしくみ——

精神主義のしくみ

Ver. 2020-07-14

宮下英明 著

精神主義のしくみ

本書について

本書は、

<http://m-ac.jp/>

のサイトで書き下ろしている

『精神主義のしくみ』

を PDF 文書にしたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

目次

| | |
|-------------------------|-----------|
| 0 導入 | 1 |
| 0.1 はじめに | 2 |
| 0.2 本論考の目的 | 4 |
| 0.3 本論考の方法 | 6 |
| 0.4 本論考の構成——2部構成の意味 | 24 |
| 1. 全体主義 | 10 |
| 1 精神主義 | 11 |
| 1.0 要旨 | 12 |
| 1.1 精神主義とは | 15 |
| 1.1.0 要旨 | 16 |
| 1.1.1 存在の無意味 | 17 |
| 1.1.2 疎外——個が系の員であるということ | 17 |
| 1.1.3 劣等感・無力感 | 17 |
| 1.1.4 「精神」を立てて己を保つ | 17 |
| 1.2 精神主義の要素 | 18 |
| 1.2.1 神 | 19 |
| 1.2.2 ゴール | 22 |
| 1.2.3 ことば | 23 |
| 1.3 精神主義の類型 | 25 |
| 1.3.1 「善」 | 26 |
| 1.3.2 「倫理」 | 27 |
| 1.3.3 「誠実」 | 28 |
| 1.3.4 「原点回帰」 | 30 |
| 1.3.5 「極める」 | 32 |
| 2 全体主義 | 35 |
| 2.1 全体主義とは | 36 |

| | |
|------------------------------------|-----------|
| 2.1.0 要旨 | 37 |
| 2.1.1 「全体主義」は物理的規模の話ではない | 38 |
| 2.1.2 法の意味固定と付和雷同 | 40 |
| 2.2 画一化社会 | 43 |
| 2.2.1 画一化 | 44 |
| 2.2.2 世間体 | 45 |
| 2.2.3 コンプライアンス | 46 |
| 2.3 画一化業権 | 48 |
| 2.3.1 画一化社会・全体主義・聖職 | 49 |
| 2.3.2 聖職者の憂鬱 | 50 |
| 3 「人民革命」の全体主義 | 55 |
| 3.1 マルクス主義 | 56 |
| 3.1.0 要旨 | 57 |
| 3.1.1 科学を標榜 | 58 |
| 3.1.2 科学標榜の中身：生物学不能 | 60 |
| 3.1.3 科学標榜の中身：システム学不能 | 62 |
| 3.1.4 「人間」予言——「人間とは本来……」思考 | 65 |
| 3.2 大虐殺 | 66 |
| 3.2.1 悪の矯正・退治 | 67 |
| 3.2.2 「階級的憎悪」——ルサンチマン ("Tarantel") | 68 |
| 3.2.3 粛清 | 72 |
| 4. 自由主義 | 75 |
| 4.1 全体主義への不適応・反抗 | 76 |
| 4.1.1 個の多様性&全体主義 → 不適応者発現 | 77 |
| 4.1.2 適応障害（「発達障害」） | 77 |
| 4.1.3 外れ者 étranger | 78 |
| 4.1.4 反抗 | 79 |
| 4.2 相対主義 → 個人主義 → 自由主義 | 81 |
| 4.2.1 「自由」 | 82 |

| | | | |
|------------------------------|-----|-------------------------------|-----|
| 4.3 「自由」立論 | 84 | 6.3 例：『リゾーム』（ドゥルーズ／ガタリ） | 133 |
| 4.3.0 要旨 | 85 | 6.3.1 『リゾーム』とは | 134 |
| 4.3.1 公理：「個性・立場の多様性」 | 87 | 6.3.2 『リゾーム』の著者はどこを間違っているか | 142 |
| 4.3.2 引用：精神障害・犯罪 | 87 | 7 革命屋自滅の公式 (1)：自負心→孤独 | 145 |
| 4.3.3 説明：「脳生成」——偶然がつくる多様性 | 87 | 7.1 自負→身内批判→孤立→見栄 | 146 |
| 4.4 カミュの「中庸」論——『反抗的人間』 | 88 | 7.1.1 不和・喧嘩別れ | 147 |
| 4.4.1 「過激」 | 89 | 7.1.2 引っ込みがつかない——大言壮語へ | 148 |
| 4.4.2 「中庸」 | 91 | 7.1.3 孤立化を「裏切者を粛清」で合理化 | 149 |
| 4.4.3 「反抗」 | 93 | 7.1.4 <若者>を自分の味方に見立てる | 150 |
| 4.4.4 カミュ批判作法 | 94 | 7.2 例：『シュールレアリズム宣言』（A.ブルトン） | 151 |
| 5 反パルタイ | 101 | 7.2.1 「第一宣言」（1924, 28才） | 152 |
| 5.1 パルタイ | 102 | 7.2.2 「第二宣言」（1930, 34才） | 154 |
| 5.1.1 「パルタイ」とは何か | 103 | 7.2.3 「第三宣言のための序論」（1942, 46才） | 162 |
| 5.1.2 粛清 | 106 | 8 革命屋自滅の公式 (2)：真面目→消亡 | 165 |
| 5.2 反パルタイ | 110 | 8.0 要旨 | 166 |
| 5.2.1 「反パルタイ」とは | 111 | 8.1 例：島崎藤村『夜明け前』 | 167 |
| 5.2.2 カミュ『反抗的人間』 | 113 | おわりに | 169 |
| 5.2.3 「ノンポリ・ラジカル」 | 114 | | |
| 5.2.4 フーコーの場合 | 115 | | |
| 5.3 同型研究 | 120 | | |
| 5.3.1 「数学教育学」 | 121 | | |
| II. 精神革命主義者 | 124 | | |
| 6 精神革命主義 | 125 | | |
| 6.0 要旨 | 126 | | |
| 6.1 精神革命主義 | 128 | | |
| 6.1.1 <精神の良し悪し>主義は、精神革命を夢想する | 129 | | |
| 6.1.2 革命屋 | 130 | | |
| 6.2 例：本居宣長 | 132 | | |

本文イラスト，ページレイアウト，表紙デザイン：著者

0 導入

0.1 はじめに

0.2 本論考の目的

0.3 本論考の方法

0.4 本論考の構成——2部構成の意味

0.1 はじめに

ポストモダンとは、お里が Kommunismus である。

この命題を措いてみて、はたと思いついた。

〈お里が Kommunismus〉は、シュールレアリズムもそうだった。

フランス「五月革命」のときのサルトルといい、〈お里が Kommunismus〉は 20 世紀フランス知識人の思想の体質のようだ。

机上論は、だいぶ昔に既に飽和している。

今後も「新思潮」の趣で登場するものは、昔の思想の蒸し返し——
——標題を変えたもの——である。

ポストモダンとは、曖昧に消えていった。

シュールレアリズムもそうである。

実際、これらは、曖昧に消えるという形で終わるのみである。

なぜか。

それが、革命思想の終わり方だからである。

革命は、成らない。

よって、革命思想は曖昧に消えて終わるのみなのである。

このことを、『革命屋自滅の公式』と題して、メモ的に簡単に書き留めておこうとしたのだが、やってみるとやはり 1 ページで収めるのは無理となった。

それどころか、(いつものことなのだが) けっこうな構成の論考になる気配である。

この「はじめに」も、論考の進み具合に応じて変更される定めにある。

(2020-02-21)

2020-03-05

論考は、論考を構成する作業になる。

構成は、小理論の体系化の趣きになる。

この中で、当初論じようとした題目が、体系の中心から外れていくということが起きてくる。

本論考も、こうなってきた。

最初に立てた題目は『革命屋自滅の公式』であったが、いまは全体 4 部構成のうちの最後の部である。

全体を眺めてみて、いまの構成にかなっている題目は『精神主義』のようである。

そこで、本日からこの題目に改める。

0.2 本論考の目的

ひとのうちには、つぎの考え方をする者たちがいる：

「世の中は、人がつくることで斯くある」

彼らは、世の中の不具合・不条理を見るとき、つぎのように思う者たちである：

「ダメな人間が世の中を動かしている

——よい人間に替われば、世の中は改まる」

そしてこのとき彼らが立てる「よい人間」の内容は、「真っ直ぐな精神」である。

世の中の不具合・不条理は「ねじ曲がった精神」がもとだ、となる。

彼らは、人の自然は「真っ直ぐな精神」であるとする。

そこで、人の自然を取り戻せば世の中は改まる、となる。

世直しの行動は、「ねじ曲がった精神」の駆逐である。

この考え方では、世の中を改める行動はごく敷居の低いものになる。

能力は問題ではなく、「真っ直ぐな精神」であればよい。

こうして彼らが世直しの行動を考えると、それは「人民路線」になる。

ここで「人民」とは、「真っ直ぐな精神」をもつ者の謂である。

「人民」は「大衆」とほぼ重なる。

というのも、彼らは世の中を「ねじ曲がった精神の者が優位にいる」の構図に見る者だからである。

「人民」を最もよく表す者は、世の中の穢れにまだ染まっていない子ども・若者ということになる。

こうして、彼らの行動戦略は必ず、子ども・若者の感化・組織化を重要目標に据える。

本論考は、彼らの考え方を「精神主義」と呼んで、これに対する批判の形をつくってみようとするものである。

なぜ批判しようとするのか。

第一に、「世の中は、人がつくることで斯くある」は間違いだからである。

そして第二に、ひとは「ひとそれぞれ」であるが、精神主義者は「ひとそれぞれ」を否定してかかってくる者たちだからである。

精神主義者は、自分の度量・持ち分に依じて、「ねじ曲がった精神」の排斥に努める者である。しかし、精神主義から見た「ねじ曲がった精神」も、「ひとそれぞれ」のうちである。

「ひとそれぞれ」を否定してかかってくる者たちは、「ひとそれぞれ」では済ませられない存在ということになる。

0.3 本論考の方法

精神主義を批判することは、^{たやす}容易くはない。

この場合の下手は、「ねじ曲がった精神」が「真っ直ぐな精神」を批判する体になることである。

しかも、精神主義者は固定した存在ではない。

ひとはその時々^たの立場に依って、ある時は精神主義者となってひとを攻撃し、ある時は精神主義者から攻撃される。

また、スケールも様々である。

慣習や体制は、精神主義の最も大きな形態である。

精神主義批判の方法は、精神主義とは何かをただただ解明することである。

これが、自ずと批判を構築していることになる。

この方法で不足はない。

これは即ち、「科学」が精神主義批判の方法論になるということである。

科学である精神主義批判は、科学の進化とともに批判の論法が進化することになる。

精神主義批判は昔からずっとあるが、いま改めてこれを繰り返す意味があるとすれば、科学の進化に応じたバージョンアップである。

0.4 本論考の構成——2部構成の意味

本論考は、二つの別の主題を扱っている。

それぞれ、「全体主義」「精神革命主義者」と題した。

「全体主義」は、つぎの論考である：

- ・人の<生きる>は、<人の系で生きる>である。
この生き方に弱る者は、自分を保とうとして「精神」を立てる。
人の系には、色々な精神主義がある。
- ・人の系は、<一つの精神主義的なイデオロギーに員全体が付和雷同する>が起こる。
これは、全体主義になる。
- ・個は多様であるから、全体主義は<外れ者>を生む。
この者は、自分を守ろうとする。
行動では、反抗・隠遁・偽装・自己欺瞞。
思想では、自由主義を立てる。

「精神革命主義者」は、つぎの論考である：

- ・人の系は、精神主義的な革命イデオロギーが色々現れる。
- ・イデオロギーを立てる革命は、ことばに過ぎない。
即ち、「ひとの革命的実践がこれを成し遂げる」とはならないものである。
したがって、このイデオロギーを実践しようとする者——革命屋——は、自滅することになる。
- ・革命屋には自負心タイプと真面目タイプがあり、この2タイプに

応じて革命屋の自滅も2様になる。

自負心タイプは孤立が最終相で、真面目タイプは挫折が最終相。

この二つの主題は、実際のところ、つながっていない。

端的に、別個のものである。

一つの論考に別個の2つを並べることになったのは、成り行きである。

即ち、本論考はつぎのように増殖した：

『シュールレアリズム宣言』

→ 革命屋

→ 「人民革命」の全体主義

→ 反パルタイ

→ 反抗

→ 精神主義、全体主義、自由主義

実際、本論考の最初の題は『革命屋自滅の公式』であり、『精神主義のしくみ』の題は後になってつけたものである。

I. 全体主義

- 1 精神主義
- 2 全体主義
- 3 「人民革命」の全体主義
- 4 自由主義
- 5 反パルタイ

1 精神主義

- 1.0 要旨
- 1.1 精神主義とは
- 1.2 精神主義の要素
- 1.3 精神主義の類型

1.0 要旨

ひとは、人を類別する。
 類別の仕方は色々である。
 性、体格、器量、出自、……

なかには、人の類別に「精神」を用いる者がいる。
 「精神」を立てるのは、観念論である。
 したがって「精神で類別」は、主義である。
 この主義を、「精神主義」と呼ぶことにする。

「精神」を立てるのは、観念論である。
 現実の人間は、「この人の精神は……」となるものではない。
 「この人の精神は……」は、レッテル貼りである。

「この人の精神は……」のことばに遭ったとき、そこから視線を向けるべき対象は、このレッテルを貼られた者ではなく、レッテルを貼った者である。

そして問え。

「この者は、どうしてこのようなレッテル貼りをするのか？」

精神主義は、病気である。

「この人の精神は……」のことばは、これを言った者の鏡像である。
 「この人の精神は……」のことばを言う者は、「この人の精神は……」を言う自分に見とれる者である。

自分に見とれたいために、「この人の精神は……」を言うのである。
 これは、病気である。

精神主義の病理、それは<疎外>である。

ひとは、自分を自分以外と比較する。
 これをすると、自分つまらない存在になる。
 つまらない存在の自分は、疎外感をもつ。
 ひとは、この疎外感から脱けようとする。
 どんなふうにする？
 幻想を用いるのである。
 幻想の中なら、自分がひとより優れているようにできる。

つまらない存在の自分がひとより優れているもの、それは見えるものの類には無いことになる。

ひとより優れているとして立てるものは、見えないものである。
 それは「精神」ということになる。

実際、「精神」だと、誰もが自分が一番になれる。

もっともたやすいのが、「善」。

「自分はこんなにも善であるのに、ひとは善をないがしろにする」
 クレーマーとは、このような存在である。

そしてこのバリエーションが、ずらりと並ぶように有る。

「信仰心」「誠実」「規則遵守」「愛国心」「大和魂」「階級的憎悪」……

この手の精神主義は、要るものが無い。

手ぶらで足る精神主義である。

そこで、全員が同じ精神主義を掲げることが起こり得る。

これが、全体主義である。

個は多様であるから、実際は全員とはならない。

外れ者が析出する。

この者たちは、全体主義によって粛清される。

粛清するのは、権力ではない。

全体主義では、大衆が競って警察になる——人民警察。

この人民警察が、外れ者を粛清するのである。

以上論じたように、精神主義はひとの自衛反応であるというポジティブな面と、全体主義に流れるというネガティブな面がある。

1.1 精神主義とは

1.1.0 要旨

1.1.1 存在の無意味

1.1.2 疎外——個が系の員であるということ

1.1.3 劣等感・無力感

1.1.4 「精神」を立てて己を保つ

1.1.0 要旨

ひとにとって自分が生きる系（「体制」）は、先ず所与として現れる。
ひとの＜生きる＞は、＜系に適応＞である。

適応は、簡単なことではない。
個の多様性は、ドロップアウトを一方の極とする適応度の多様性として現れる。

己の不適応を意識する者は、己の不適応をつぎの二通りの形で了解しようとする：

- a. 自分がダメ
- b. 体制がダメ

「体制がダメ」に向かう者は、社会を＜穢れ＞に見立てようとする。
そして、つぎのように思う / 思おうとする者になる：

「わたしは穢れを退ける——これは適応しないということだ」

この者は、自分を精神の高潔な者と見立てる。
「精神の高潔」を立てる思弁的構えを、本論考は「精神主義」と呼ぶことにする。

1.1.1 存在の無意味

（作成予定）

1.1.2 疎外——個が系の員であるということ

（作成予定）

1.1.3 劣等感・無力感

（作成予定）

1.1.4 「精神」を立てて己を保つ

（作成予定）

1.2 精神主義の要素

1.2.1 神

1.2.2 ゴール

1.2.3 ことば

1.2.1 神

人は、自分との係わりに応じて、存在を意味づける。
人の系では、員に共通に係わる存在に、意味がつけられる。

存在を意味づけるとは、存在が〈現象〉になるということである。
——ひとには、意味づけしていない存在は見えていない。

註：人の脳は、自分に意味のあるものだけに見えるようにする。
特に、人によって、そして同じ個人だと成長段階によって、見えるものが違う。

ひとは、〈現象〉に原因・理由を措こうとする。
いまの時代だと、「原因・理由の措定は、科学的探求を以て」となる。
これより前の時代は？
「神」が立てられた。
——「これは、神の仕業である！」

不可思議な現象は、不可思議で蓋をするのみである。
その蓋として、「神」が発明された。

アニミズムは、存在のダイナミクスを擬〈生き物〉化し、それを神とした。
この神は八百万の神となり、色々な生き物が神にされる。

実際、存在のダイナミクスに代わる神は、人格神では無理である。人格神だと人の心を措くことになり、一方、不可思議は人の心を超えるものだからこそ不可思議なのである。

しかし、人間と森羅万象すべてをひとりの人格神に負わせる宗教が、西洋に登場した。

キリスト教である。

「世界は、神によって創造された。

以来、神が世界を運行している。

現前は、すべて神の計らいである。」

キリスト教は、理屈がめんどうになる。

人間社会は、いいこと・わるいことのごちゃまぜである。

これを神の計らいにしなければならない。

世のひどい不幸や不公平を神の計らいとして説明するためには、「人のうかがい知れない神の深慮」を立てるしかない。

しかし「何だ、その深慮って？」

この努力と屁理屈は、科学の進歩とともに、放棄されるようになる。

そしてこの放棄は、西洋文学・哲学の一大作品群を生むことになった。

これらの事は、「八百万の神」の者には対岸の出来事である。

「神が死んだ」だの「不条理」だのは、対岸の声である。

特に日本人にとっては、そうである——根っこが「八百万の神」なので。

しかし日本の「知識人」は、文明開化以来の西欧コンプレックスを身につけた者なので、自分をこの対岸の声に同化させてきた。

彼らにとって、西欧はいつも指針を求める先である。

西欧コンプレックスの者は、自文化に目が行かない。

「物自体—現象」の存在論などは、仏教の「色即是空空即是色……」でとっくの昔から知られている。

「八百万の神」の者にとって——「色即是空空即是色……」の者にとってもそうだが——「不条理」は世界を考える出発である。

西欧の方から「不条理」の声がいまさら聞こえてくるのは、「神の計らい」の考えを引き摺ってきたからである。

このときの「不条理」は、「善悪」が立たないことの謂いである。

「八百万の神」の者に、「善悪」は無い。

「八百万の神」は存在のダイナミクスの写しであり、そして存在のダイナミクスに「善悪」は無いからである。

キリスト教文化の科学者は、科学と神の両立が己の問題になる。

「八百万の神」文化の者は、「八百万の神」を科学の主題に還すだけのことである。

1.2.2 ゴール

(作成予定)

1.2.3 ことば

ヒト以外の生物に、精神主義はあるか？

ない。

精神主義は、〈ことばで思考する〉が必要条件になるからである。

ことばは、脳の現象である。

リアルは、脳の外の現象である。

ことばは、リアルの「捨象」なんかではない。

ことばは、リアルに立ち向かう道具——大工道具みたいなもの——である。

例えば、「1時間」ということば。

「1時間」というリアルがあるか？

「ストップウォッチのスタートボタンを押し、1時間後にストップボタンを押し。その間にあるものがリアルだ！」

その「リアル」って何だ？

答えられまい。

「1時間」は、リアルの「捨象」ではない。

木を伐り倒そうとするときの斧みたいなものである。

精神主義は、ことばとリアルを混同するものである。

ことばを、己のリアルにする。

実際、ことばで思考することは、ことばを己のリアルにすることである。

精神主義は、このダイナミクスの一事例である。

ことばをもつ生き物は、人間だけではない。

しかし、人間以外のことばをもつ生き物は、ことばを正しく使う。

ことばとリアルを混同するということばの用途の間違いをやるのは、人間だけである。

1.3 精神主義の類型

1.3.1 「善」

1.3.2 「倫理」

1.3.3 「誠実」

1.3.4 「原点回帰」

1.3.5 「極める」

1.3.1 「善」

「己は善の側につく」主義がある。

これは、「善 vs 悪」を立てる精神主義である。

「善悪」は、ことばである。

この精神主義は、ことばである「善悪」を、リアルにしてしまう。

おおもとで間違っているわけであるから、リアルの中でつねに矛盾する。

結局壊れるのが定めである。

本論考の「精神主義の様相」の部は、「善」の精神主義についての論考である。

よってここは、「善」の精神主義の主題提起のみとする。

1.3.2 「倫理」

(作成予定)

1.3.3 「誠実」

「己は誠実の側につく」主義がある。

これは、「誠実 vs 不実」を立てる精神主義である。

「誠実」の場面は、ゲームである。

「誠実」は、「与えられたゲームを誠実に務める」である。

ゲームは、約束事である。

「誠実」は、「約束事を誠実に行う」である。

「誠実不実」は、ひとまず「善悪」とは別モノである。

実際、悪事を仕事にしている組織の員は、悪事を誠実に行う者である。

「誠実」は、ゲームの外では通用しない。

しかし「ゲーム」の視点に立てば、「誠実」と「善」の違いは守備領域の広さの違いでしかなくなる。

「善」は、己を「普遍的」と定める精神主義である。

翻って、「善」は、世界を守備領域にしてしまった「誠実」である。

こうして「善」は、「誠実」の特殊という捉えになる。

「誠実」は、ゲームの中で葛藤することになる。

「誠実」を行うのは、生身の人間である。

「誠実」は、生身の保守と矛盾する。

「誠実」は、畢竟ただのことばである。

「誠実」の精神主義は、ことばである「誠実」をリアルにしてしまう。おおもとで間違っているわけであるから、これはリアルの中でつねに矛盾する。

「誠実」の葛藤は、ただのことばに蹂躪されている様である。

始まったものが生き延びる形は、＜進化＞である。

＜進化＞の形をとらないものは、終わるものである。

「誠実」の精神主義は、後者である。

「誠実」の精神主義の終わり方は、2通りになる：

- a. 自壊
- b. 外が容認しないものとなり、外から潰される

自壊も、2通りになる。

- a1. 葛藤を持ち堪えられない個が、精神崩壊する
- a2. 仲間割れ

1.3.4 「原点回帰」

「原点回帰」主義がある。

これは、「原点」を立てる精神主義である。

この精神主義は、2通りの立場がある：

- a. 創業する
- b. 現組織を原点に回帰させる

ふつうは、後者の立場で「原点回帰」が唱えられる。

ここでも、これのみを取り上げる。

この精神主義は、無効である。

理由は、つぎの2つ：

1. 「原点」は心象 / 幻想であり、それはただのことばである
2. 組織は進化していまに至っているものであり、そして進化は不可逆である

(1) 「ただのことば」

心象 / 幻想が、スカスカのことばであることを確認せよ。

これは、1分間のリアルも思い描くことができない。

「原点」のことばで指しているつもりのリアルは、定めし年単位のスパンのものである。

「原点回帰」は、「このリアルがわかっているのか」となる話である。

(2) 「進化は不可逆」

「原点回帰」主義者は、組織の員がみな「原点回帰」の思いをもてば成ると考える。

しかしその員は、目に見えているものである。

目に見えているものは、目に見えていない膨大なものを引き摺っている。

いまの組織を変えるとは、この膨大なものを変えるということである。

狙う方向に変えるとは、全システムの変化を制御するということである。

これは、できることではない。

「原点回帰」主義者は、このことに考えが及ばない。

もし組織が「原点回帰」に動き出せば、その組織は自壊する。

1.3.5 「極める」

自分の生き方を「何かを極める」に寄せる——これも精神主義の一類型になる。

一般に、精神主義は方便と重なる。

即ち、精神主義は、自分の生き方を楽にしたり生産的にする方便になっている。

「善」の精神主義も、「誠実」の精神主義も、「原点回帰」の精神主義も、そうである。

この「方便」の観点から、「極める」主義に、上の3つの主義との差別化になる特徴を与える。

それは、《色々と取り換えが利く》がである。

色々と取り換えが利くとは、なんか違うなとなったら棄てればよいということである。

そのときは、極める何かを他にさがしたり、何か極めるという生き方をやめる、ということになる。

「極める」は、「先が見えないことを我慢する」である。——ゆえに、精神主義である。

この我慢を勤めることを、「修行」と謂う。

また、極めようとしている何かはわからないので、この何かに至る道を歩んでいるイメージを以て、修行の対象を「道」と呼び慣らす。

2 全体主義

2.1 全体主義とは

2.2 画一化社会

2.3 画一化業

2.1 全体主義とは

2.1.0 要旨

2.1.1 「全体主義」は物理的規模の話ではない

2.1.2 法の意味固定と付和雷同

2.1.0 要旨

精神主義は、体制への不適応を「精神の高潔」で合理化しようとするものである。

この「精神の高潔」は、善悪を立てることに進む。

精神主義は、すぐれて倫理主義である。

体制への不適応から発する「精神の高潔」は、体制への恨みの裏返しである。

精神主義の倫理主義は、怨念 *ressentiment* の裏返しである。

この倫理主義は、どす黒く不気味なものである。

これが解発 *release* される事態になると、「悪の粛清」が始まる。

倫理主義による「悪の粛清」の体制は、全体主義である。

この全体主義は、統制主義とか画一主義から区別されるものである。

国家総力戦体制の全体主義は、統制主義である。

コンプライアンスの全体主義は、画一主義である。

倫理主義の全体主義は、中世ヨーロッパのカトリック教会の異端断罪とか、マルクス主義のブルジョア断罪とかが、例になるものである。

2.1.1 「全体主義」は物理的規模の話ではない

「善悪」を立てることは、それ自体で全体主義である。

全体主義は、物理的規模の話ではない。

論理的外延が全体になる主義が、全体主義である：

変項 x をもつ命題「 x は P 」(「 x は花が好き」) を立てる。

W を全体集合(「人全体」)とする。

このとき、 $A = \{x \in W \mid x \text{ は } P\}$ が、 P の外延である。

全体主義は、「条件 P に対する全体主義」のことで、 $A = W$ (「人はみな花が好き」) とするものである。

$A = W$ (「人はみな花が好き」) を立てる全体主義者は、 P (「花が好き」) を「正義」に見立てる者である。

いま P を正義とする体制が立ったとする。

個は多様であるから、 $A = W$ (「みな花が好き」) とはならない。

この主義に不適應となる者が存在する： $W - A \neq \emptyset$

しかも、<不適應者>は「少数の者」を意味しない。

例えば「国論二分」というのがあるが、これは、多数決の勝敗がつけば全体の半数が<不適應者>になる場合である。

しかし全体主義者においては、「正しい者はみな……」である。

全体主義者にとって<不適應者>は悪である。

全体主義者は、悪が伝染したり体制に反逆したりすることがないよう、彼らの粛清を行う。

「善悪」を立て「正しい者はみな……」の形の命題を立てるのが、「倫理」である。

かくして、倫理を立てることは、全体主義とイコールである

繰り返すが、全体主義は物理的規模の話ではない——論理的外延が全体になる主義が全体主義である。

よくよく吟味すべし。

2.1.2 法の意味固定と付和雷同

人の系は、生態系である。

それは、多様な個の衝突をダイナミクスにして自己組織化する系である。
系の現前は、「衝突の均衡」を表している。

この系は、法——系の員が自らに強いるべき行動規範——を現すことになる。

この法は、形式である。

形式の意義は、「意味を固定しない」である。

自由の担保である。

実際、法の要諦は自由の担保である。

しかし何かの契機で、員における〈法の意味固定とそれへの付和雷同〉が暴発することがある。

法が「マニュアル」の形になることを、員が好むようになる。

逸脱者を許さない警察の役を自ら振る舞うことを、員が好むようになる。

これが、「全体主義」である。

法がそのまま全体主義なのではない。

形式を立てること（抽象）がそのまま全体主義なのではない。

繰り返すが、形式の意義は、「意味を固定しない」である。

形式は、その立場において反マニュアル主義・反全体主義である。

実際、賢い立法者は、自由をできるだけ担保しようとする。

特に憲法は、そのようにつくられるものである。

何とでも解釈できるようになっている。

「状況に応じて都合よく解釈せよ」と言っているのである。

数学は、これを「形式の学」と言う者がいるが、数学をする者は特定の意味をきっちり頭に描いている。

しかし記述は、形式主義で臨む。

自由をできるだけ担保しようとするからである。

自由をできるだけ担保しようとするのは、自由が好きだからである。

いまの社会は、すべてのことに「マニュアル」が備わっていることが、正義とされる。

ひとは、〈いいかげん〉を嫌う。

自由の余地を見つけたら、一つの意味できっちり埋められることを望む。

そして、一つの意味がいつもきっちり執行されることを望む。

「コンプライアンス」主義である。

「いいかげん」は、加減が智慧であった時代の「好い加減」である。

いま悪い意味のことばになっているのは、加減を智慧としなくなったからである。

実際は、ひとはマニュアル&コンプライアンスの社会に息苦しさを感じている。

しかしその息苦しさは、自分の首を絞めている自分のもとである。

《自分で自分の首を絞めて息がつまる》

これに対し何と**言うべきか**。
「世話ねえや」である。

2.2 画一化社会

2.2.1 画一化

2.2.2 世間^{てい}体

2.2.3 コンプライアンス

2.2.1 画一化

ひとは、自分が周りの者とは違うふうにならないよう努める。
ひとの考え方・振る舞いは、このようにして身につく。
このようにして身についたものは、当たり前として、自覚されない。

例えば、「黙祷」。

ひとは、これについて「何をするのか？」で困らない。

「これは、何がどうなることか？」で困らない。

しかし、この周りとの同化がうまくいかないタイプの者がいる。
彼らは、「適応障害」ということになる。
彼らは、ひとが当たり前に行っている考え・振る舞いのロジックに拘って
しまう。
ひとの当たり前は、ロジックがわからないので、彼らを息苦しくさせる。

この息苦しさは、形而上的なものなぞではない。

単純に、生理的なものである。

「適応障害」と謂う所以である。

「適応障害」は、精神障害である。

——ただし「障害」は、「少数派」がこれの意味である。

2.2.2 世間体

(作成予定)

2.2.3 コンプライアンス

体制は、進化する。

その進化は、一面、責任体制の進化である。

責任体制は、《どんな事故にもその責任者がある》という形に進化する。この場合の「責任者」は、「失敗をなじられ・謝罪し・懲戒処分を受ける者」である。

このような責任体制では、だれも責任者の立場を持ち堪えられない。そこで責任者のことを、「判断・指示を自分で考えて下す者」ではなく「与えられたマニュアル通りに事を運ぶ者」にする。

事故が起きれば、「マニュアルに不足／間違いがあった」「マニュアル通りにしない者が現れた」という言い方で、マニュアルや他の者のせいに見えるわけである。

責任体制のこのような進化は、社会を規則で張り巡らすものになる。規則が隈無く張り巡らされたこの社会を、コンプライアンス社会という。この社会の員は、表向きの行動ばかりでなく、人に知られ得る行動はすべて＜規則遵守の行動＞に成していかなければならない。

註：この行動様式を、昔は「官僚主義」と呼んだ。

みなが官僚主義になったいまは、「官僚主義」は死語である。

コンプライアンス社会の員として生きる能力は、だれもが持てるものではない。

先ず、つぎの能力が要る：

a. 規則が頭に入る

そして、コンプライアンス社会の規則は、アリバイづくりのための規則、表面を取り繕う規則、当座をやり過ごす規則であるから、つぎの能力が必要になる：

b. 規則の欺瞞性にさほど意識が向かわない

ひとの中には、この能力のまったくダメな者が、一定割合でいる。運動がダメ、歌うのがダメ、絵を描くのがダメ、数学がダメ、等々と同じように、＜規則がダメ＞タイプの者がいるのである。

2.3 画一化業

2.3.1 画一化社会・全体主義・聖職

2.3.2 聖職者の憂鬱

2.3.1 画一化社会・全体主義・聖職

個は、多様である。

画一化社会は、多様な個を画一化する社会である。

「個の多様性」は、「画一化から外れる者が存在する」を含意する。

その者は、画一化に対し＜反抗＞を現してくる者である。

そこで画一化社会は、画一化を押しつける仕業が、生業になる。

「画一化業」というわけである。

実際、「救助・救済・治療・矯正・教育・指導」等のことばで表現される仕業が、これになる。

画一化は、全体主義である。

画一化業は、全体主義を押しつける仕業である。

画一化社会は、画一化業を＜逆らってはならない仕業＞にしなければならない。

そして、実際そのようになる。

画一化ダイナミクスは、ひとの幻想にも作用するのである。

ひとは、画一化業を＜逆らってはならない仕業＞にしていく。

このレベルにまつり上げられた職業を、「聖職」という。

「聖職」は、聖なる職だから聖職なのではない。

ひとに画一化を押しつけるためには「聖」幻想を要するので、聖職なのである。

かくして、各種救済・指導——医療・宗教・教育等——の職が、聖職になる。

ひとは、救済・指導されねばならないものになる。

ひとの多くは、救済・指導を恩恵と思っているが、これは強制である。

救済・指導が恩恵になる者、それは画一化が自分に合う者たちである。

画一化から外れる者たちは、救済・指導が強制になる者たちである。

画一化から外れる者たちは、救済・指導を苦痛にして、これに反抗する。

彼らの^{てい}体は、画一化が自分に合う者たちには理解できない。

「せっかく救済・指導してくれようというのに、なんという馬鹿者だ！」

となる。

画一化社会、全体主義、聖職——これらはセットである。

よくよく吟味すべし。

2.3.2 聖職者の憂鬱

個は、多様である。

多様な個に対し、画一化（全体主義）を押しつけるのは、〈自分勝手〉である。

画一化が少数派を多数派に同化しようとするものときは、〈多数の横暴〉である。

しかし画一化社会は、画一化を押しつける仕業を〈聖〉にしていく社会である。

画一化を押しつける仕業が職業になるとき、それは「聖職」になる。

こうして「個の多様性」から見た「聖職」は、欺瞞・偽善である。

聖職者は、欺瞞・偽善の者である。

「個の多様性」は、「聖職者のうちにも、画一化から外れる者が紛れる」を含蓄する。

この者は、自分の立場に欺瞞・偽善を思う者になる。

「個の多様性」は、自己欺瞞を思う者のなかにもタイプの違いを現す。但し、その違いは連続していて、つぎのベクトルの配合比の違いといったものである：

憂鬱（ウジウジ）

自嘲

割り切り（「こんなもんだ」）

破戒

文学では、この手合いを主人公にするものが、一分野をなしている。
あまりにありふれていて、例を挙げるまでもない。

また「破戒」の素材は、宗教学の方に揃っている。

e.g. 『禅とは何か』

3 「人民革命」の全体主義

3.1 マルクス主義

3.2 大虐殺

3.1 マルクス主義

3.1.0 要旨

3.1.1 科学を標榜

3.1.2 科学標榜の中身：生物学不能

3.1.3 科学標榜の中身：システム学不能

3.1.4 「人間」予言——「人間とは本来……」思考

3.1.0 要旨

「マルクス主義」は、いまは死語である。
しかしこれは、格好の「精神主義」教材になる。
「精神主義」の要素がすべて含まれているからである。
そして、事例満載である。

この教材は、歴史教材ということになる。
学習の構えは、「他山の石」「温故知新」である。
内容では特に「粛清」が、この構えで見ておくべきものになる。。
人間は主義で他の者を殺せる生き物であるが、桁違いの大量殺戮を簡単にやっつける主義は、マルクス主義が屈指だからである。

3.1.1 科学を標榜

マルクス＝エンゲルスは、科学を標榜する者である。

しかし、＜科学を立場にしている＞は、＜科学をやっている＞とはならない。

＜科学を立場にしている＞は、慢心になり、雑なロジックをつくり出す。

つぎは、青年ヘーゲル派に対するマルクス＝エンゲルスの批判：

Marx=Engels (1846), 序文, p.16

あるときひとりの感心な男が、人々が水におぼれるのはただかれらが^{●●●●}重力の思想にとりつかれているからだ^{●●●●}と想像した。もしもかれらが、この観念を迷信的な観念だとか宗教的な観念だとか宣言でもして頭におかなくなれば、かれらはどんな水難にも平気でいられるであろう、と。一生涯かれはこの幻想とたたかった。重力の幻想の有害な結果についてはどの統計もあらたな数おおくの証明をかれにあたえたのだった。この感心な男こそドイツのあたらしい革命的な哲学者たちの典型だったのである。

しかし、マルクス＝エンゲルスは、イデオロギーを批判しながらイデオロギー「共産主義」をつくる。——そして「マルクス主義」という最も全体主義的な精神主義を招くもとなる。

これは、ミイラ取りがミイラになる^{てい}体である。

＜科学を立場にしている＞は、当てにならない。

＜科学を立場にしている＞の肝心は、どんな「科学」をどれほど修めているかである。

間違いの予防は、適切な「科学」を修めていることによる他はない。

上の青年ヘーゲル派批判では、「重力」がメタファに用いられている。

この「重力」は、ニュートン力学の「重力」である。

今日だと、これは「重力場」にできる。

そして「重力場」だと、マルクス＝エンゲルスのイデオロギー化邁進を鎮める効果があったかも知れない。

実際、「重力場」メタファだと、人の系は

「個々がこれの因子となるところの、自己生成する系」

になり、

「個の行動は、系を変えることになるが、系の変化の制御はできない」

となるわけである。

引用

Marx=Engels (1846) : Die Deutsche Ideologie

・古在由重 [訳] 『ドイツ・イデオロギー』(岩波文庫), 岩波書店, 1956

3.1.2 科学標榜の中身：生物学不能

Marx=Engels (1846), p.33

かくて思弁のやむところ、現実的な生活において、**現実的な実証的な科学**がはじまる。

すなわち人間の実践的な活動の、実践的な発展過程の叙述がはじまる。

意識についての言辞はやみ、現実的な知識がそれにかかわらねばならない。

独立的な哲学は現実の叙述がはじまるとともにその存在の媒質をうしなう。

同上, pp.43,44

すなわち労働が分配されはじめるやいなや、各人は一定の専属の活動範囲をもち、これはかれにおしつけられて、かれはこれからぬけだすことができない。

かれは猟師、漁夫か牧人か批判的批判家かであり、そしてもしかれが生活の手段をうしなうまいとすれば、どこまでもそれではないなければならない——

これにたいして共産主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲をもたずにどんな任意の部門においても修業をつむことができ、社会が全般の生産を規制する。

そしてまさにそれゆえにこそ私は**まったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判をすることができるようになり、しかも猟師や漁夫や牧人または批判家になることは**

ない。

科学を標榜していながら、「まったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判をする」という幼稚な論をつくる。

このギャップは、なんなのか。

それは、「人間」の捉えがまったくできていないことを示すものである。

人間は、〈いま〉の反映ではない。

〈進化していまに至っている〉というものである。

進化は、〈祖先種を部分的に改修〉の累積である。

〈いま〉は、〈過去〉の記憶といったものである。

そして、〈過去〉がふつうに頭をもたげる。

人間は、生物をやめることはできない。

「まったく気のむくままに……」は、生物の存り方でない故に、人間のあり得る形ではない。

生物の生活は、余裕は無くされるようになっている。

「余裕」とは、「これに割り込んだり、つけ込んだりする者が現れる」ということだからである。

引用

Marx=Engels (1846) : Die Deutsche Ideologie

・古在由重 [訳] 『ドイツ・イデオロギー』(岩波文庫), 岩波書店, 1956

3.1.3 科学標榜の中身：システム学不能

Marx=Engels (1846), pp.43,44

すなわち労働が分配されはじめるやいなや、各人は一定の専属の活動範囲をもち、これはかれにおしつけられて、かれはこれからぬけだすことができない。

かれは猟師、漁夫か牧人か批判的批判家かであり、そしてもしかれが生活の手段をうしなうまいとすれば、どこまでもそれではないなければならない——

これにたいして共産主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲をもたずにどんな任意の部門においても修業をつむことができ、**社会が全般の生産を規制する。**

そしてまさにそれゆえにこそ私はまったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判をすることができるようになり、しかも猟師や漁夫や牧人または批判家になることはない。

マルクス主義は、「社会が全般の生産を規制」のことばを信じるものである。

信じていられるのは、「社会が全般の生産を規制」の内容を深くは考えないようにしているからである。

共産主義体制がひどいことになるのは、この思考停止の報いというものである。

この思考停止は、「システム」の考えがひどく幼稚であることの現れである。

マルクスの『資本論』は、中身は「商品論」ないし「商品経済論」である。これは、システム学である。

しかしマルクスは、「システム」の考えの核である「形式と内容の区別」を失する者となった。

「資本論」の標題は、「資本家」という階級概念に誘導されたためである。マルクスは、「支配階級 - 対 - 被支配階級」の図式を立てる者であった。——「ブルジョア - 対 - プロレタリア」は、この図式の^{いち}バージョンである。

そして、「支配階級の打倒」として「共産主義革命」を立論する。

「形式と内容の区別」の考えがもたれていれば、「支配階級の打倒」の立論は、支配階級とこの階級を占めている者を先ず区別することになる。形式がもし残るべきものなら、内容の殲滅は、新たな内容による形式の充填を呼び込むのみである。

共産主義革命も、こうなるのみのものである。

「全般の生産を規制」するのは具体的な誰かであるが、その誰かは支配階級になる。

実際、共産主義体制は、革命で打倒した支配階級よりいっそう容赦のない支配階級を形成するばかりとなったわけである。

マルクスは、『資本論』および史的唯物論を以て、現支配体制自壊の必

然を説く者であった。

このとき「自壊」の内容を、「被支配階級が支配階級を暴力で倒す」に定めた。

他の形を想像できなかったのは、彼が「正反合」の弁証法に即くヘーゲリアンだったからである。

現代のわれわれは、「自壊」を実際に経験したきた / している者として、「自壊」の内容を知っている。

自壊のダイナミクスは、マルクスが同定したように、商品経済である。

ただマルクスは、自壊の形を読めなかった。

自壊の形は、つぎの通りである：

商品経済は階級をなし崩しにする。

商品経済がつくる人の分類は、「成功者・失敗者」である。

成功者・失敗者は絶えず交替する。

成功者とは、「明日は失敗者」のことである。

3.1.4 「人間」 予言——「人間とは本来……」 思考

(作成予定)

引用

Marx=Engels (1846) : Die Deutsche Ideologie

・古在由重 [訳] 『ドイツ・イデオロギー』(岩波文庫), 岩波書店,
1956

3.2 大虐殺

3.2.1 悪の矯正・退治

3.2.2 「階級的憎悪」——ルサンチマン ("Tarantel")

3.2.3 粛清

3.2.1 悪の矯正・退治

〈精神の自由〉主義——精神のタイプに対する相対主義——の逆は、〈精神の善悪〉主義——精神のタイプに良否を立て、等級をつける——である。

〈精神の善悪〉主義は、《悪い精神を矯正する——矯正の見込みのないものは退治する》の考えに進む。

そこで、〈精神の善悪〉主義で、現体制を悪い精神との往還に解釈するものは、革命主義になる。

その革命は、《悪い精神を打倒し、悪い精神に抑圧されてきた良い精神を解放する》である。

この革命が成ると、革命政権の意に沿う精神が良い精神になり、沿わない精神は悪い精神になる。

この悪い精神は、矯正・退治の対象になる。

これは、精神の自由が無くなるということである。

このように、「悪を倒す」を「解放」の内容にする革命は、革命が成ったら必ず粛清体制になる。

これまでに革命政権国家がいろいろ立ったが、これらを観じてひとが教訓とすべきは、《精神のタイプに良否を立ててはならない》である。——《〈精神の自由〉を立場とするのみ》である。

3.2.2 「階級的憎悪」——ルサンチマン ("Tarantel")

Nietzsche (1885), 「毒ぐもタランテラ」より

見なさい、これが毒ぐもタランテラの穴だ！ その正体を見たいと望むのか？

ここにくもの巣がかかっている。さわって、ふるわせてごらん。

くもがいそいそと出て来た。よく出て来た、タランテラ！

おまえの背中には、黒い三角のしるしがついている。おまえの魂のなかにあるものも、わたしには見当がついている。

おまえの魂のなかにあるのは復讐の一念だ。

おまえに噛まれると、真黒なかさぶたができる。

おまえの毒は復讐心を植えて、人びとの心を狂わせ、踊らせる。

平等の説教者たちよ！

わたしが諸君に話しているのは比喩だ。諸君も人びとの心を狂わせ、踊らせるではないか。諸君は毒ぐもタランテラだ。

隠れた復讐心の持ち主だ！

しかし、わたしは諸君の隠しているものを明るみに出してやるう。

わたしが諸君に面とむかつて、わたしの高山の哄笑をあげせかけるのもそのためだ。

わたしが諸君のくもの網をこわすのもそのためだ。

諸君を怒らせ、嘘でかためたその穴からおびきだし、諸君の口癖の「正義」の背後から、諸君の復讐心をおどりださせようと

するわけだ。

なぜなら、人間が復讐心から解放されること、これがわたしにとって、最高の希望への橋であり、長期の悪天候のあとの虹であるから。

もちろんタランテラの願うところは、そうではない。

「世界中に、われわれの復讐心で暗くなった悪天候がゆきわたること、これをわれわれは正義と呼ぶ」——かれらはたがいにこう語りあう。

「われわれに対して等しくないすべての者に、復讐と誹謗を加えよう」——タランテラたちは心をあわせて、こう誓う。

「そして『平等への意志』——これこそ将来、道徳の名にかわるべきものだ。権力を持つ一切のものに反対して、われわれはわれわれの叫びをあげよう！」

諸君、平等の説教者たちよ！

してみれば、権力にありつかない独裁者的狂気が、諸君のなかから、「平等」を求めて叫んでいるのだ。

諸君の、ふかく秘められた独裁者的情欲が、こうした道徳的なことばの仮面をかぶっているのだ！

傷つけられた自負、抑圧された嫉妬、おそらくは諸君の父祖の自負であり、嫉妬であったものが、諸君のなかから、復讐の炎となり、狂気となってほとばしり出てくるのだ。

父親が黙って押隠していたものが、息子になると、口をききだす。

わたしはしばしば息子が、暴露された父親の秘密であるのを見た。

この説教者たちは、いかにも感激に駆られている者といったふうだ。しかしかれらを興奮させているのは、純真な感情ではなくて、——復讐の念なのだ。

またかれらが緻密で冷静になるなら、それは精神がそうさせるのではなくて、かれらの嫉妬が緻密で冷静にさせるのである。

かれらの敵愾心は、またかれらをして思想家の道を歩ませもする。

それが敵愾心だということは、——かれらがいつも行きすぎをやることでわかる。

あげくのはては、かれらは疲労のあまり雪の原で行き倒れになったりする。

かれらがあげるすべての不平の声からは、復讐の念が聞こえる。かれらが呈するすべての讃辞には、ひとを傷つける意図がある。ひとを裁く者だということが、かれらには無上の幸福と思われる。

しかし、わが友人たちよ、わたしはあなたがたに、こう勧める。ひとを罰しようという衝動の強い人間たちには、なべて信頼を置くな！

かれらは悪質で、素姓の劣った人間たちなのだ。

かれらの顔からのぞいているのは、首斬り人と密偵だ。

自分の正義をしきりに力説する者すべてに、信頼を置くな！

まことに、かれらの魂に欠けているのは、円熟の蜜ばかりではない。

たとえば、かれらがみずから「善くてただ義しい者」と称していても、

あなたがたは忘れてはならない。

かれらがパリサイ人となるために欠けているのは、ただ——権力だけであることを。

わが友人たちよ、わたしをほかの者と混同したり、取り違えたりしてくれるな。

生についてのわたしの教えと同じものを説く者がいる。

それが同時に平等の説教者、すなわち毒ぐもでもあるのだ。

毒ぐもどもは、その穴のなかにひそんで、生に背いているにもかかわらず、しかも生を讃え強調する。

これはその相手に打撃を与えようという意図だ。

その相手とは、現に権力を掌握している者たちのことだ。

この権力者たちのあいだでは、いまもなお死の説教がはばをきかせているからである。

もしそうした事情がなければ、タランテラどもはまた別の教えを説いたであろう。

その昔、最もたくみに世界を誹謗し、異端者を火あぶりにした者たちも、ほかならぬこの毒ぐもの一族であった。

引用文献

Nietzsche (1885) : Also sprach Zarathustra

・氷上英廣 [訳] 『ツアラトウストラはこう言った(上下)』(岩波文庫), 岩波書店, 1967.

3.2.3 粛清

マルクス主義は、なぜ大量殺戮に進む。

なぜか？

「プロレタリアによるブルジョアの打倒」の「ブルジョア」は、もともと実体概念ではない。

「ブルジョア」は「ブルジョア的」に解釈され、人に対し恣意的にラベリングされるものになる。

そして、マルクス主義の組織では、「ブルジョア的」とラベリングされることは粛清されるということである。

組織が大きくなるほど、粛清は大規模になる。

国家規模になると、簡単に百万、千万の単位になる。

例：スターリン大粛清 *Большой террор*

毛沢東文化大革命

ポル・ポトの大粛清

4 自由主義

4.1 全体主義への不応・反抗

4.2 相対主義 → 個人主義 → 自由主義

4.3 「自由」立論

4.4 カミュの「中庸」論——『反抗的人間』

4.1.1 個の多様性&全体主義 → 不応者発現

(作成予定)

4.1 全体主義への不応・反抗

4.1.1 個の多様性&全体主義 → 不応者発現

4.1.2 適応障害 (「発達障害」)

4.1.3 外れ者 étranger

4.1.4 反抗

4.1.2 適応障害 (「発達障害」)

(作成予定)

4.1.3 外れ者 étranger

ひとの生きる場は、社会である。

社会は、<規則遵守を強いられる>がひとの生き方になるところである。

ひとの生き方は、このほかではない。

実際、ひとが規則に従って生きないことは、社会が成り立たないことである。

ここに、<規則遵守を強いられる>に堪えられないタイプの者がいる。

彼らは、「外れ者」になる。

「外れ者」は、個性のうちである。

外れ者は、一定割合で存在する。

こうなるのは、自然の摂理である。

4.1.4 反抗

外れ者は、これもひとつの立派な個性である。

しかし、規則遵守を自分の人格にしているタイプの者は、外れ者を<更生のための社会的救済が与えられるべき者>と定める。

外れ者を「弱者」「発達障害者」と言い直したりして、「自分は彼らの味方」と思い上がる。

ひとを「救済」「更生」させることを自分の使命のようにしているこのおせっかいな質^{たち}の者たち——実質、<規則遵守を強いられる>を率先して行動する者たち——は、「篤志家」とか「教育者」と呼ばれ、善い人の意味になる。

外れ者は、彼らのおせっかいによって、さらに生き方を苦しくさせられる。

→「倫理はウザイ」

こうして、篤志家・教育者を寄せ付けないようにすること——とりわけ教育者を寄せ付けないようにすること——が、外れ者が自分を保つために行うことになる。

方法に大きく二つある。

「引きこもり」と「ワル」である。

「ワル」の意味は、「更生の見込みがない」である。

「更生の見込みがない」と認められれば、教育者は自分に近づかない。

「引きこもり」は<ひとから逃げる>ストラテジーで、「ワル」は<ひ

とを退ける>ストラテジーである。

自然の摂理として、外れ者は一定割合で存在する。

学校は、生徒の一定割合が外れ者である。

外れ者は、「引きこもり」「ワル」のどちらかのストラテジーをとる。

学校は、業務の一定割合が、引きこもり生徒対策とワル生徒対策である。

「ワル」は、偽悪である。

反抗は、世の中の偽善に偽悪で対抗するというものである。

偽悪は、世の中がこれを許している間のいのちである。

そして偽悪を持ち堪えるのはそれだけでもたいへんであるから、偽悪はたいてい、やっつけられるより先に自滅する。

4.2 相対主義 → 個人主義 → 自由主義

4.2.1 「自由」

4.2.1 「自由」

「自由」は、不自由を意識することから、反照的にその概念がもてるというものである。

即ち、不自由を意識することがないうちは、「自由」のことばで何を言いたいのかわからない。

不自由の内容は、

周りに自分を合わせることを、自ら強いてしまう

周りが自分に対し、周りと同じにせよと強いてくる

である。

<周りに合わせる>は、社会生活の中では常のことなので、ひとはこれを習い性にしていく。

よって、たいていは不自由から免れている。

そして少数派として、不自由な者たちがいる。

不自由な者にとって「自由」とは、「周りに自分を合わせなくてよい」である。

翻って、周りに自分を合わせなくてよくなるのが、「自由獲得」である。

「自由獲得」の方法は、ロジックとして、つぎの3通りになる：

- a. 周りを抹殺する
- b. 自閉する
- c. 「精神の相対性」を立て、周りにこれを認めさせる

そしてこのうちで生産的なのは、3番目の相対主義——マルチカルチャー主義——である。

世の中には、「表現者」と称されるタイプの者が色々いる。

彼らは「相対主義を実践している者」という位置づけになる。

4.3 「自由」立論

4.3.0 要旨

4.3.1 公理：「個性・立場の多様性」

4.3.2 引用：精神障害・犯罪

4.3.3 説明：「脳生成」——偶然がつくる多様性

4.3.0 要旨

精神主義の倫理主義は、「悪の粛清」を含蓄する全体主義である。

この全体主義は、退けるものである。

<元の木阿弥>が結果でしかない破壊の果てに自壊するものだからである。——ならば、はじめから退けておいた方がよい。

精神主義を退けることは、思うほど簡単なことではない。

スタンスは、科学である。

注：精神主義批判の墓穴は、精神主義批判が精神主義になってしまうことである。

倫理主義批判の形は、「個性・立場の多様性」の立論である。

倫理主義は、特定の個性・立場に偏していることになるからである。

考え方・行動の仕方は、人それぞれである。

そして、立場によってころころ変わるものである。

「個性の多様性」の観点からの倫理主義批判では、「精神障害（狂気・発達障害）」や「犯罪」を引用するのが常套になっている。

理由は、これらが倫理の立つ瀬の無くなるところだからである。

しかし、「倫理の立つ瀬が無くなるところ」を言い出すならば、引用先は何か特別なものである必要はない。

即ち、<生業^{なりわ}う>が既に、倫理の立つ瀬が無くなるところである。

<生業う>は、《自分が生き残るために犠牲を求める》を骨格とし、状

況に合わせてこれに内容をつけるものだからである。
「立場の多様性」は、特にこのことを謂うものである。

「個性の多様性」の説明は、「脳生成」である。

脳は、自己組織化する系である。

自己組織化の契機は、個体が遭遇する事物である。

「偶然の統合」といったものになるこの脳生成は、個体によってバラバラなものになる。

一方、偶然の確率に高い・低いがあるため、いわゆる「通常・異常」の別が現れる。

4.3.1 公理：「個性・立場の多様性」

(作成予定)

4.3.2 引用：精神障害・犯罪

(作成予定)

4.3.3 説明：「脳生成」——偶然がつくる多様性

(作成予定)

4.4 カミュの「中庸」論——『反抗的人間』

- 4.4.1 「過激」
- 4.4.2 「中庸」
- 4.4.3 「反抗」
- 4.4.4 カミュ批判作法

4.4.1 「過激」

正義は、「悪を退治する」になって、殺人に向かう。

虚無（「神は死んだ」）は、英雄（超人）主義の「すべてが許されている」に転じると、殺人に向かう。

カミュは、この2タイプの「殺人的」を、「過激 *démésure* (excess)」のこぼで主題化する。

Camus (1951), pp.255,256.

革命の過誤は、人間性から分離することができないと思われるあの限界、反抗が正しく示しているあの限界をまったく知らないか、あるいは故意に誤解しているかによって起ったのである。この境界を無視するが故に、虚無的な思想は、結局一様に加速度のついた運動の中に突入してしまう。そのもたらす結果については、止めだてするものは何もない。そこで完全破壊や無限の征服を正当化してしまう。

同上, pp.258.

純粋にして単純な徳は、殺人的なのである。またあらゆる現実主義には道德的要素が必要で、シニシズムは殺人的である……

同上, pp.261.

精神の陶醉状態は、過激のめまいか、不可能への気違い沙汰

……

引用文献

Camus, Albert (1951) : L'Homme révolté, Librairie Gallimard, 1951.

・佐藤朔・白井浩司 [訳] 『反抗的人間』, 新潮社, 1956.

4.4.2 「中庸」

カミュは、「過激」を退ける方法論をつくる。

「中庸」が、これである。

Camus (1951),, p.257.

過度が限度を組織するのにふさわしい思索を呼び醒ます。

……

現実には完全には合理的でなく、
合理的なものがまったく現実的なものでもない。

……

不合理は合理を制限し、
合理はまた不合理に限界をあたえる。

……

変化の創始者ヘラクリトスは、この永遠の流転に限界をあたえた。

この限界は、中庸の女神で、過激の宿敵であるネメシスによって象徴された。

反抗の現代的矛盾を念頭に入れようとする思索は、この女神に靈感を求めるべきであろう。

道徳的矛盾もまた、この調停的価値の光線に照らして漸く解決されはじめる。

徳が現実から離れるときには、悪の原理とならざるをえない。
それが完全に現実と同化するときはまた自己を否定せざるをえない。

<どっちもどっち>の言い方がされているが、これはわれわれには仏教でお馴染みのものである。

実際、これが「中庸」の言い方になる。

カミュは、この「中庸」に、夜に対する昼、ヨーロッパに対する地中海のイメージを与える：

同上, p.260

知性がきびしい日光とかたく結ばれている地中海こそ、この人間性の秘密を保持している。……

ヨーロッパはいつも、この正午と深夜の闘争の中にあつた。

この闘争を見棄て、夜で昼を辱かしめるとき、ヨーロッパは墮落した。

引用文献

Camus, Albert (1951) : L'Homme révolté, Librairie Gallimard, 1951.

・佐藤朔・白井浩司 [訳] 『反抗的人間』, 新潮社, 1956.

4.4.3 「反抗」

カミュは、実践論を示さねばならぬと思う者であつた。

「過激」の言い方で自分が批判する相手は、実践主義を唱える者である。この彼らに対し、自分も実践主義で応じねばならないと思うのであつた。

Camus (1951), p.23.

反抗の問題の現代性は、社会全体が、今日、神聖から離れようとした事実につながっている。

……

反抗がわれわれの歴史的現実なのである。

現実逃避をしない限り、そのなかにわれわれの価値を発見しなければならない。

神聖から離れ、その絶対的価値なしで、行動の法則を見つけることができるだろうか。

これが反抗によって提出された問題である。

自分が批判する相手が示してくる実践は、集団化する実践である。よって、自分も集団化する実践で応じねばならない。

同上, pp.23,24.

人間の連帯性は、反抗的行動に基いている。

そして反抗的行動は、こうした共犯性のなかにしか、正当の理由を見いだすことができない。

……

不条理の体験では、苦悩は個人的なものである。
 反抗的行動が始まると、それは集団的であるという意識を持ち、それが万人の冒険となる。
 だから、自分が異邦人であるという意識にとらえられた精神の最初の進歩は、この意識を万人とわけ合っているのだということをもとめ、人間的現実、その完全性のなかにあっても、自己と世界とを引き離す距離に悩むものだとすることをみとめることにある。

……

われ反抗す、故にわれら在り。

自分が批判する相手の実践は、殺人的破壊になるものである。
 だから自分は批判するのである。
 この自分が彼らに対置するものは、秩序である。

同上, p.25.

奴隷は、彼の身分のなかであたえられる条件に反対し、形而上的反抗者は、人間としてあたえられる条件に抗議する。
 叛逆的奴隷は、主人の扱い方に承服できないものが自らのうちにあることをみとめる。
 形而上的反抗者は、創造によって欺かれたと宣言する。
 どちらにとっても、純粹で、単純な否定だけが問題なのではない。
 事実、どちらにも価値判断があり、反抗者はそれに従って、みずからの条件の承認を拒絶する。

主人に反抗して立ち上った奴隷に、存在としての主人を否定する気持のないことを注目したい。
 彼は主人としての、主人を否定する。
 主人が、奴隷を、その要求の故に否定する権利を持つことを否定するのだ。
 主人は、要求を無視して、それに応じない程度に従って、失格する。
 もし人間が、各人のなかにあるとみとめられている共同の価値に頼ることができなければ、人間は互に不可解な者になってしまう。
 反逆者は、彼にこの価値があることを、はっきりみとめてくれと要求する。
 この原則がなければ、無秩序と犯罪が世界を支配する恐れがあるからである。
 反抗的行動は、彼のうちで、光明と統一の要求として現れる。
 どんな初歩的な叛逆でも、逆説的にいえば、秩序への希求を現している。

以上の叙述は、一言一句、形而上的反抗者にもあてはまる。
 彼は世界の統一を要求するために、分裂した世界に反抗する。
 彼のうちにある正義の原則と、世界にはびこっている不正の原則とを対立させる。
 だから彼はもともと、この矛盾を解決し、できれば正義の一元的支配を打立てるか、あるいはぎりぎりまで追いつめられて、不正の一元的支配を打立てることしか望まない。
 それまでは、彼は矛盾を告発する。
 人間の条件の不完全な点にたいしては、死によって抗議し、不

統一な点にたいしては、悪によって抗議する形而上的反抗は、生と死の苦悩にたいして、幸福な統一を要求する。

引用文献

Camus, Albert (1951) : L'Homme révolté, Librairie Gallimard, 1951.

・佐藤朔・白井浩司 [訳] 『反抗的人間』, 新潮社, 1956.

4.4.4 カミュ批判作法

カミュは、「革命」を否定する者であった。

そして「革命」とはちがう「反抗」の実践論を生真面目に対置しようとする者であった。

ところが彼は、一方でつぎのように述べていたのである：

Camus (1951), p.257.

ヨーロッパの秘密は、もはや人生を愛さない点にある。
ヨーロッパの盲人たちは、人生の一日を愛することは、圧迫の数百年を正当化することになると、子供らしく思い込んでいた。限界にたいする焦慮、二重生活の拒否、人間であることの絶望は、結局彼らを非人間的な過激に投げ込んだ。
人生の正しい偉大さを否定して、彼らは自分の優秀さにすべてを賭けなければならなかった。

とすると、カミュはさしずめ、実践論を対置しないことは「圧迫の数百年を正当化することになると、子供らしく思い込」む者ということになる。

実際、「反抗」の実践論など余計なことだからである。

ひとは、生活の上にさらに実践論を措くようなものではない。

カミュは、デカルトのコギトに倣った「われ反抗す、故にわれらあり」を言う。

しかし、「われらあり」は、「われ生活する、故にわれらあり」で完結しているのである。

神が死んで困るのは、ヨーロッパの類である。

不条理に苦しむのは、ヨーロッパの類である。

ヨーロッパの外は、不条理には「世の中そんなもんだ——他にどんなだ
というのだ」で対する。

<生きる>において、ひとは格別な生物であるわけではない。

生物がその中で生きている世界には、条理と不条理の別なぞない。

生物の実践論は、「生活を努める」である。

生物の「反抗」は「生活を努める」のうちである。

カミュは「反抗」などなぜ余計なことを言うのか。

「人それぞれ」をやはり信じていないからである。

「人間のあるべき」を立て、「われわれ」「連帯」を言ってしまうのである。

カミュにとって、「道徳」や「正義」は意味のあることばである。

根っここのところでは、彼が批判する者たちと変わらない。

ヨーロッパのうちなのである。

Camus (1951), pp.262,263.

適宜に歴史に反抗することを知っている者が、歴史を前進させることができる。

これには限りない緊張と、ルネ・シャールが語っている痙攣した
平静が予想される。

だが、真の人生はこうした分裂の只中に現れる。

人生はこの分裂そのものであり、精神は光線の火山の上を漂い、
正義を狂おしく求め、中庸について甚しく頑固になる。

反抗の長い冒険の果で、われわれの耳に鳴りひびくものは、不幸のどん底では用をなさない楽天主義のことばではなくて、海辺では同じように美德である勇気と知性のことばである。

こんにちいかなる叡智も、これ以上のものをあたえると称することはできない。反抗は性こりもなしに悪と戦っているの
で、悪から新しい飛躍を引きだすより仕方がない。

人間は自分のなかの抑えるべきものを抑えることができる。

創造のなかで修正しうるものを修正しなければならない。

その後で、完全な社会になったとしても、子供はやはり不当な死に方を
するだろう。

人間は最大の努力を払っても、世界の苦痛を数的に減らすことを
考えることしかできない。

それでも不正と苦悩は残るだろう。

数がどんなに限られても、それらはやはり言語道断だろう。

ドミトリ・カラマーゾフの「なぜか？」の叫びはひびきつづける
だろう。

芸術と反抗は、地上最後の人間とともに はじめて消滅するだろう。

ヨーロッパの外は、これを「ヨーロッパ・センチメンタリズム」と定めて済ますのみである。

引用文献

Camus, Albert (1951) : L'Homme révolté, Librairie Gallimard, 1951.

・佐藤朔・白井浩司 [訳] 『反抗的人間』, 新潮社, 1956.

5 反パルタイ

5.1 パルタイ

5.2 反パルタイ

5.3 同型研究

5.1 パルタイ

5.1.1 「パルタイ」とは何か

5.1.2 粛清

5.1.1 「パルタイ」とは何か

歴史を<ゴールに到達する過程>と考え、この論考を哲学に仕上げた者がいた。

ヘーゲルである。

ヘーゲルが立てたゴールは、「絶対理念」である。

この哲学を、ヘーゲルの歴史哲学という。

その後、歴史に対する<ゴールに到達する過程>の考えをそっくりもらい、ただし「絶対理念」を観念論と批判して唯物論の歴史哲学をつくる者が、現れた。

マルクスである。

マルクスが立てたゴールは、「共産制」である。

マルクスは、現体制を<共産制移行直前のいま将に崩壊しようとしている体制>と定めた。

『資本論』は、崩壊を証明しようとする論考である。

歴史を<ゴールに到達する過程>とする考えは、ヨーロッパ(キリスト教世界)的である。

ヨーロッパの外だと、「諸行無常」とか「輪廻」、せいぜい「絶滅に向かう過程」、といった考えの方がふつうになる。

ゴール論は、「ひとはゴールに到着して救われる」論になる。

ゴール到着がずっと先のことなら、ひとはずっと救われないものになる。

そこで「ゴール=共産制」論は、修飾されることになる。

即ち、「現体制は暴力で倒すことができ、これにより共産制の実現がす

ぐにも成る」と。

この考え方を、マルクス主義という。

マルクス主義は、暴力革命を実践論にするイデオロギーである。

革命実践主体の前衛・中核になろうとする者が、パルタイ（党 partei）を組織する。

「共産党」である。

「マルクス主義」「共産党」は、時代の移り変わりとともに、はやらなくなるものである。

いまの時代、これは論じてもしようがない。

一方、「パルタイ」の概念は普遍的である。

よって、これについて一線を設ける意味はある。

ひとには、「世直しの実践」を信じるタイプの者がいる。

このタイプの者のうちにさらに、「世直し実践主体の前衛・中核の組織」を信じるタイプの者がいる。

彼らが実際にその組織をつくるとき、それが「パルタイ」である。

パルタイのエネルギーは、ルサンチマンである。

パルタイは、人の世にルサンチマンがありふれている分、ありふれている。

パルタイの「世直し」は、ルサンチマンの解発 release である。

よってそれは、殺人的である。

平和な時代の最も危険なパルタイは、マスコミである。

マスコミは、**ひとの知性が劣化する状況で**、パルタイ化する。

ひとを善と悪に分け、悪と定めた者が十分に攻撃されるよう情報を操作し、デマゴギーを広める。

ひとのマスコミに対する認識は「正しい情報ソース」であるから、マスコミのデマゴギーには手も無くやられてしまう。

したがって最も危険なパルタイということになるのである。

5.1.2 肅清

パルタイは、際立った軍隊的組織として立つ。

パルタイの員は、兵士である。

正義を同じにし、考え方を同じにし、正義実現のために一致団結して戦う兵士である。

正義を共にしない者は、悪であり、敵である。

共同体の中の敵は、すみやかに駆除すべきものである。

とりわけパルタイの中は、駆除に障害が無いのだから、駆除はただちに実行されるべきである。

この「敵の駆除」を、「肅清」と謂う。

このように、パルタイは必ず「肅清」の考えに進む。

「駆除」の中身に程度の違いがあるだけである。

敵を立てる思考は、単純思考——物事の「複雑」を考えることのできない思考——である。

よって、この思考タイプが駆除を実行すれば、それはひどく単純なものになる。

即ち、<殺す>になる。

そしてこの場合、単純思考の度合いがひどいほど、<殺す>がひどくなる。

即ち、大虐殺になる。

この例を挙げるとしたら、何ととっても、毛沢東である。

「文化大革命」は、大量殺戮がその裏の顔であった。

カンボジアのポル・ポト政権下の虐殺も、ポル・ポト派が毛沢東主義を自分たちの革命イデオロギーにするものだったためである。

実際、つぎの体制の中では、ひとは身の安全をかりそめにしか保てない：

『毛主席語録』「4. 人民内部の矛盾を正しく処理する」

われわれの前には2種類の社会的矛盾がある。すなわち、敵味方のあいだの矛盾と人民内部の矛盾である。これは性質のまったく異なった2種類の矛盾である。……

敵味方のあいだの矛盾と人民内部の矛盾という2種類の異なった矛盾を正しく認識するためには、まず、人民とは何であり、敵とは何であるかをはっきりさせなければならない。

……現段階、すなわち社会主義建設の時期においては、社会主義建設の事業に賛成し、これを擁護し、これに参加するすべての階級、階層、社会集団は、みな人民の範囲にはいり、社会主義革命に反抗し、社会主義建設を敵視し、破壊するすべての社会勢力と社会集団はみな人民の敵である。……

反革命分子を肅清する問題は、敵味方の矛盾の闘争の問題である。

『毛主席語録』「2. 階級と階級闘争」

階級闘争、一部の階級が勝利し、一部の階級が消滅する。これ

が歴史であり、これが数千年にわたる文明史である。……

階級社会では、だれでも一定の階級的地位において生活しており、**どんな思想でも階級の烙印のおされてないものはない。**……

すべて反動的なものは、倒さないかぎり、倒れはしない。これも掃除とおなじで、ほうきがとどかなければ、ごみはやはりひとりでに逃げはしない。……

われわれの敵はだれか。われわれの友はだれか。この問題は革命のいちばん重要な問題である。……

われわれの革命がまちがった道にみちびかれず、かならず成功するという確信をもつためには、われわれのほんとうの敵を攻撃するのに、ほんとうの友と団結することに心をつかわなければならない。

ほんとうの敵と友とを見わけるためには、われわれは中国社会の各階級の**経済的地位と革命にたいするその態度**とについて、大すじの分析をおこなわなければならない。……

たえず動揺している中産階級は、その右翼がわれわれの敵になりうるであろうし、その左翼はわれわれの友になりうるであろう。

しかし、われわれは、かれらにわれわれの陣営をかきみださせないよう、つねに警戒する必要がある。……

帝国主義者と国内の反動派はけっしてかれらの失敗に甘んぜず、なお最後のあがきをするであろう。

全国平定後も、かれらはやはりさまざまな方法で破壊と攪乱

《かくらん》に従事し、時々刻々、中国でその復活をたくらむであろう。

これは必然的なことであり、少しも疑う余地のないことであって、われわれは絶対に自己の警戒心をゆるめてはならない。……

階級闘争はまだおわってはいない。……

修正主義あるいは右翼日和見主義はブルジョア思潮であって、それは教条主義よりもさらに大きな危険性をもっている。……わが国の社会主義革命が基本的に勝利をおさめたのちにも、社会のいちぶには、まだ資本主義制度を復活させようと夢みるものがおり、かれらは思想面での闘争をふくめて、あらゆる面から労働者階級に闘争をしかけてくる。

そして、この闘争では、**修正主義者がかれらの最良の助手**である。

引用文献

『毛主席語録』，外文出版社，1967

5.2 反パルタイ

5.2.1 「反パルタイ」とは

5.2.2 カミュ『反抗的人間』

5.2.3 「ノンポリ・ラジカル」

5.2.4 フーコーの場合」

5.2.1 「反パルタイ」とは

反抗屋の偽悪は、世の中の偽善と対立しようとするものである。
この反抗屋のなかから、「真実は自分の方にこそある」と思う者が現れる。
さらにこの者の中から、

「欺瞞を打倒し、真実を立てる」

の思いをもつ者——精神革命主義者——が現れる。

反抗屋が偽悪を以て対立しようとする偽善は、即ち体制である。

したがって、反抗は反体制をやっていることになる。

反抗屋のうちに、「反抗＝反体制」の構図に意識的になる者がいる。

「反抗＝反体制」に「真実は自分の方にこそある」が合わさると、「体制が変わるべきである」になる。

こうして反抗屋の中からは、体制革命主義者も現れる。

ここに、革命による体制の転覆を目指すパルタイがある。

パルタイは、「敵の敵は味方」の論理で、反体制勢力を自組織に回収しようとするものである。

パルタイは、反抗屋の回収を図る。

この相関ダイナミクスの中で、精神革命主義者はつぎの2派に分かれることになる：

- a. 精神革命は、体制の革命として実現されるものである
- b. 精神革命は、文化運動として実現されるものである

商品経済社会は、体制革命の候補が「共産主義革命」ただ一つになる。

パルタイは、即ち共産党である。

よって、体制革命を頼む格好の精神革命論が現れるのは、共産主義革命のムーブメントが盛り上がる時代である。

逆に、そんなムーブメントがあり得ない時代は、精神革命論は文化運動論になる。

共産主義革命ムーブメントの時代の精神革命主義者は、共産党につく者とつかない者に分かれる。

しかし、反抗屋上がりで共産党につく者は、自分と共産党を分かっていないことになる。

反抗屋は、体制不適應者である。

その「体制」の内容は、規則である。

人は体制の中で<兵士>になる。

体制は<軍隊>である。

<軍隊>は、命令系統（ヒエラルキー）と規則で保たれる。

共産党は、<軍隊>の程度がさらに高まった組織である。

規則不適應者である反抗屋にとって、共産党はいっそう棲めるところではない。

このことがわかっている反抗屋は、共産党につかない。

わかっていないで共産党入った反抗屋は、やがて肅清される者になる。

革命が成る前なら「除名」、革命が成った後なら「処刑」というわけである。

5.2.2 カミュ『反抗的人間』

(作成予定)

5.2.3 「ノンポリ・ラジカル」

「パルタイ＝共産党」の意味の「反パルタイ」は、日本では「全共闘の時代」(1970年前後期)に現れた。

全共闘運動参加者には日本共産党や新左翼につかない者がいて、その立場を当時「ノンポリ・ラジカル」と称したのであるが、これが「反パルタイ」に相当する。

もっとも、「ノンポリ・ラジカル」を扱った者は、パルタイに何か嫌な気配を感じて「ノンポリ・ラジカル」を扱ったのであって、「ノンポリ・ラジカル」の意味を理解して扱ったわけではない。

5.2.4 フーコーの場合

フーコー (1978) において、フーコーは「お里が反抗屋の、反パルタイの精神革命主義者」である。

なお発言内容については、時代——フランス「五月革命」が10年前、ベルリンの壁崩壊が11年後——を斟酌する必要がある。

フーコー (1978), p.15-17

今日、われわれの**政治的イマジネーションの涸渇**ぶりはどうか。その貧困ぶりには全く驚嘆せざるをえません。……

この二十世紀の社会的 = 政治的な場における想像力の貧困なさまが、一体どこからくるのかとその理由をさぐってみると、やはり私にとっては、マルクス主義というものが重要な役を演じているように思えるのです。……

マルクス主義が、政治的イマジネーションの貧困化に貢献してしまったし、いまでも貢献しつつある……

マルクス主義なるものが、基本的な意味で権力の一様態にほかならぬという点をおさえておく必要がある。……

科学性と予言性とが、真理をめぐる拘束力として機能している……

マルクス主義と結びついた権力関係の力学から自由になることが問題……

同上, pp.20,21

マルクス主義が一つの政党というものの表現としてしか機能し

その強固なヒエラルキー的な秩序の中で、……さまざまなものを排除したり、禁止したりすることで機能していました。

それは、**異端の要素というものを追放**し、そうすることによって、活動家たちのさまざまな個人的意志を、一種の単一的な意志のもとに集結させるという組織にほかなりませんでした。そしてその単一の意志とは、指導者たちの、そして官僚的な意志であったわけです。

同上, pp.42,43

革命というものの、闘争というものの**個人的な意志**は、他の水準の意志とどうかかわるかといった問題は、私にとっても残された重要な課題であるように思います。

そして、まさに現在、その**多様な意志**が、伝統的左翼による闘争のヘゲモニーが破れた部分に噴出しはじめてもいるのです。

同上, pp.43,44

闘争における攻撃目標がたえず予言によって隠されてしまっていた……

だからその孤立した側面もまた予言の仮面のかげに姿を消してしまった。……

闘争の正統的な唯一の担い手は党しかないと思われていたわけですから、またその党というものは、合理的なある一つの決断を下しうるヒエラルキーを持った組織であるわけですから、**何か暗い狂気を含んだ部分とか、あるいは人間の活動の夜の部**

分という、まあ暗く孤立した部分というものが——いわゆる闘争には、当然、必然的に含まれていたにもかかわらず——それそのものとしてはどうしても視界に浮上してくることがなかったのです。

たぶんニーチェか、あるいは理論ではなく文学的作品だけがそれを語ったにすぎません。……

だからこそ、理論の持つこのような不十分な局面を白日のもとにさらさねばなりません。

哲学のみが唯一の規範的な思考だとする考え方を破壊する必要があるのです。

そして無数の語る主体の声を響かせ、おびただしい数の体験をして語らせねばならないのです。

語る主体がいつでも同じ人間であってはいけない。

哲学の規範的な言葉ばかりが響いてはならない。

ありとあらゆる体験を語らせ、**言葉を失った者たち、排除された者たち、死に瀕した人たちに**耳を傾ける必要があるのです。

というのは、我々は外部におり、そうした人たちこそが闘争の暗く孤立した側面を実質的に扱っているからです。そしてそうした言葉に耳を傾けるとこそが、今日西欧に生きる哲学するものつとめであろうと思います。

引用文献

フーコー (1978) : 吉本隆明・フーコー [対談], 蓮賞重彦 [通訳]「世界認識の方法」, 『海』 (7月号), 1978

・収載: 吉本隆明『世界認識の方法』, 中央公論社, 1980, pp.5-48.

5.3 同型研究

5.3.1 「数学教育学」

5.3.1 「数学教育学」

数学を勉強するとは、「数学」のことばで括られる色々な主題のうちから適当なものを選び、それを勉強することである。

一つの主題の勉強は、この主題がわかるようになる勉強である。

わかるようにしていかなばならぬものは、以下のものである：

- ・ 具体として念頭に置かれているもの（註：数学は形式の記述）
- ・ 内容個々の意味
- ・ 内容展開の論理
- ・ 内容構成の理
- ・ 応用法

この数学学習を動機づけ、さらに指導していこうというのが、「数学教育」である。

数学教育のゴールは、勉強がくわかる>に到達することである。

逆に言えば、数学教育は、勉強がくわかる>に到達しなければ、失敗である。

この数学教育に対し、これを自分の理念に回収しようとする者が現れる。彼らは、自分を「数学教育学」と称し、数学教育を<自分が目指す体制を実現するための運動>に位置づける。

この構造は、「パルタイ」である。

どんな体制を目標にするかの違いから、いろいろなパルタイが現れる。一つのパルタイの中にも、分派が形成される。

近年は、「グローバリズム立国」がこの種の目標の主流である。
この体制の員は、グローバル世界で活躍できる者である。
数学教育学は「問題解決能力」とか「リテラシー」を員たる者の能力と定め、この能力の陶冶を理論化しつつ実現しようとする。

この数学教育学の指導する数学教育は、勉強を壊すものになる。
わかったかどうか、どうでもいいことにされるからである。
実際、「リテラシー」のときは、学校現場はこれを「コミュニケーション能力」と読み換え、生徒に話し合いをさせることを授業とした。
「生徒が目を輝かせ活発に話し合った！」で、メデタシメデタシとなる。
これは数学を知らない教員もできることなので、数学教育学は教員の取り込みに成功する。
そしてこれの犠牲になるのが生徒——というわけである。

「犠牲」のことばを、おだやかでないと思うだろうか？
しかし実際、「一般陶冶」教育には必ず「学力低下」が続くのである。
そして、「基礎基本」に方針転換される。

数学の立場は、＜数学を勉強する者の自由＞主義である。
しかし、数学教育学は、数学の勉強に意味をつける。
パルタイになるのである。

こういう事情であるから、生徒はドロップアウトしてよいし、反抗してよい。

ただし、彼らのドロップアウト・反抗は、掬^{すく}われることのないものである。
なぜか。

ひとにとって、この問題構造を理解することは難いからである。
ドロップアウトする者・反抗する者も、問題が何であるかわからぬまま、ドロップアウトし、反抗するばかりである。

是非も無しと言うべし。

II. 精神革命主義者

6 精神革命主義

7 革命屋自滅の公式 (1) :
自負心→孤独

8 革命屋自滅の公式 (2) :
真面目→消亡

6 精神革命主義

6.0 要旨

6.1 精神革命主義

6.2 例：本居宣長

6.3 例：『リゾーム』（ドゥルーズ / ガタリ）

6.0 要旨

ひとにとって体制は、先ず所与として現れる。

ひとの<生きる>は、<体制に適應>である。

個の多様性は、ドロップアウトを一方の極とする適應度の多様性として現れる。

己の不適應を意識する者は、己の不適應をつぎの二通りの形で了解しようとする：

- a. 自分がダメ
- b. 体制がダメ

「体制がダメ」に向かう者は、社会を<穢れ>に見立てようとする。

そして、つぎのように思う / 思おうとする者になる：

「わたしは穢れを退ける——これは適應しないということだ」

この者は、自分を精神の高潔な者と見立てる。

精神主義は、実践主義と合わさるとき、体制の変革ないし打倒を行動しようとするものになる。

この行動は、何も起こせないか、あるいはただの破壊になるか、である。破壊はつまらぬ破壊に終始するのみであり、<元の木阿弥>がこれの結果である。

実際、体制は、「系の自己組織化」の相で変化するのみである（「系進化」）。

「系の自己組織化」の内容は、個それぞれの営みである。

体制は、これを変革・打倒しようとする者の行動で変わるようなものではない。

ひとが体制に適應している相を、「大人」と呼ぶ。

精神革命主義は、「子ども」の相である。

「子ども」は、何も起こせないか、ただの破壊をするか、である。

6.1.1 <精神の良し悪し>主義は, 精神革命を夢想する

(作成予定)

6.1 精神革命主義

6.1.1 <精神の良し悪し>主義は,
精神革命を夢想する

6.1.2 革命屋

6.1.2 革命屋

世の中は、矛盾がいっぱいである。

ひとはこの世の中に対し、

「世の中、こんなもん」

「体制を改めるべし」

の二通りの思いをもつ。

二つの比重は、ひとによって変わる。

思いの内容・深さも、ひとによって変わる。

そして一人に限っても、状況や気分によって、これらは変わる。

ひとはだいたい、年を重ねるにつれ（つまり、成長するにつれ）、「世の中、こんなもん」になる。

翻って、若い時は、「体制を改めるべし」がふつうである。

成長は、「善悪」で世の中を見ることから始まり、だんだんと「善悪は立たない」になっていく。

なぜ「善悪」で世の中を見るのが最初なのかというと、これが未熟な頭脳に可能な見方ということになるからである。

——教育は、子どもに「善悪」で世の中のことを教える。

もっとも、大人にも「体制を改めるべし」の者はふつういる。

実際、《「善悪」で世の中を見る》は、大人にも多い。

しかし大人の場合特徴的なのは、《「賢愚」で世の中を見る》である。

特にインテリの「体制を改めるべし」は、これである。

彼らは、「体制が宜しくないのは、俗物がこれを動かしているからだ」「み

なが（自分のように）賢ければ、世の中は変わる」と思う。

さてひとのなかには、「体制を改めるべし」の思いが人格を形成してしまったタイプの者が存在する。

この者たちを、革命屋と呼ぶことにする。

例えば、「間違いは正すべし」の思いが人格を形成しているクレーマーは、革命屋である。

自分の属する組織を情けないものに見てこれの改変を思う者は、革命屋である。

革命屋は、ありふれた存在である。

「革命屋」の言い回しは、これを「革命家」と呼ぶわけにはやはりいかないからである。

「革命屋」は引っ込みがつく（店をたためる）が、「革命家」は引っ込みがつかない。

ちなみに、引っ込みがつかない者は、あぶない者である。

権力者があぶない者になるのは、引っ込みがつかない者だからである。

そして「革命家」は、権力から遠くても、危ない者である。

自分の延命の方法が、デマゴギーとテロに限られるからである。

6.2 例：本居宣長

→ 『[本居宣長](#)』

6.3 例：『リゾーム』（ドゥルーズ／ガタリ）

6.3.1 『リゾーム』とは

6.3.2 『リゾーム』の著者はどこを間違っているか

6.3.1 『リゾーム』とは

(1) 『リゾーム』の類型

『リゾーム』は、『リゾーム宣言』である。

A. ブルトンの『シュールリアリズム宣言』と同型の、精神革命宣言である。

『シュールリアリズム宣言』との違いは、宣言しようとする精神の内容である。

即ち、『シュールリアリズム宣言』が〈無意識／深層心理〉であるのに対し、『リゾーム』は〈「自己組織化する系」の存在論〉である。

『リゾーム』の中にある「精神分析」批判は、この差別化をしようとするものである。

(2) 「リゾーム」

「リゾーム」は、科学で謂う「自己組織化する系」である。

これに尽きる。

「リゾーム」の説明では、いかにも奇を衒^{てら}ったようなことばづかいがいろいろ出てくる。これらに対しては、科学的・数学的に汲むところは無い。

(3) 「シニフィアンの覇権」

p.68

われわれは樹木には倦み疲れている。

われわれはもはや樹木や根を、また側根をも信ずるべきではない、もうそうしたものを我慢しすぎてきたのだ。

樹木状の全文化が、生物学から言語学に至るまで、そうしたものにともづいているのだ。

逆に、地下茎と空中根、雑草とリゾームを外にしては、何一つとして美しいもの、何一つとして愛に溢れたもの、何一つとして政治的なものはない。

p.68-70

樹木状システムは段階序列的システムであって、意味作用と主体化との中心、組織化された記憶、そしてまた中心的自動装置をも包含しているものである。

それはつまり、対応するモデルときたら、そこでは或る要素が一個の高位の統一からのみ、そして主観への充当が予め設定されたつながりからのみ、その諸情報を受取るようなものだからだ。

そのことは情報理論と電子機械との現下の諸問題においてはっきりと見てとれ、それらは一個の記憶ないし一個の中心的器官に権力を賦与しているかぎりにおいて、いまだに最も古い思考を保存しているのである。

だからなんだというのだ。

「樹木状システム」は、道具である。

道具は、〈自然〉の写しではないし、〈自然〉の写しである必要もない。

金槌は、リゾームのよう(?)であるべきか。

否である。

(4) 「エクリチュール」

『リゾーム』の著者にとって、精神革命の実践は「エクリチュール」である。そこで、彼らの精神革命宣言は、エクリチュール論になる。

エクリチュール論に向かうのは、彼らの思考癖というものである。
この癖と無縁なことを後ろめたく思う必要はない。

『シュールリアリズム宣言』では、エクリチュールは<無意識 / 深層心理>に順うべきものである。

『リゾーム』では、エクリチュールは<「自己組織化する系」の存在論>に順うべきものである。

実際には、彼らは、向かうべきエクリチュールの形を示すことができない。

「ごく稀な成功例」を挙げて、《ゴールはある》を仄めかすだけである。この点も、『シュールリアリズム宣言』とまったく同じである。

(5) 「地図」

『リゾーム』の実践論は、内容の無いもの——有り体に言って、しょーもないもの——である。

そのしょーもなさは、「構造的・生成的モデル」に「地図」を対置するところではっきりしてくる。

p.40

樹木の論理はすべてこれ複写と複製の理論である。……

この論理は、すっかり出来上がったものとして手に入れる何かを、超コード化する構造かあるいは支えとなる軸から出発して複写することに存している。

機木は複写の数々を分節しかつ階層序列化するのだし、複写の方は樹木の葉のようなものなのだ。

リゾームはまったく異なるもの、地図であって複写ではない。複写ではなしに、地図を作ること。……

地図が複写に対立するのは、それがすべてこれ、現実とギヤのつながった実験の方へ向いているからである。

地図は自己に閉じこもった無意識を複製するのではない、無意識を構築するのだ。

地図は諸分野の接続に協力し、器官なき身体 of 封鎖解除に、それら器官なき身体を地盤面上へと最大限に開いてやることに協力する。

リゾーム——自己組織化する系——の簡単な例として、ムクドリ of 群飛（集団の形の目まぐるしい変化）をとりあげよう。

これの地図を書くとは、個々のムクドリ of 定位を3次元座標軸 of 導入を以て成し、群れの形の時間的変化を時間軸 of 追加によって表す、というものである。

したがって、ムクドリ of 群飛 of 地図は、4次元になる。

——現実 of 地図にするときは、時間軸を<頁>に変えて、地図帳（歴史地図）にする。

この地図は、つくる者はいないし、つくってもありがたがる者はいない。
 嵩張る一方の、しょもない地図だからである。

ひとがムクドリの群飛を捉えたいと思うとき、その方法は、「地図」ではなく、「構造的・生成的モデル」である。

集団の形を変化させているものは、フィードバックのダイナミクスである。

そして「フィードバック」の内容は、《ムクドリの個々が、自分の近くの個（複数）の動きに反応する》である。

この反応の数式モデルをつくり、コンピュータでシミュレーションしてみる。

そしてムクドリの実際の群飛がだいたい再現されたら、ムクドリの群飛が捉えられたとするのである。

『リゾーム』の著者は、「構造的・生成的モデル」の思考法を「最古の思考にもとづくヴァリエーション」と言い、「地図」を正しい思考に定めるわけだが、彼らがなんと言おうと、ひとはこの場合「最古の思考にもとづくヴァリエーション」の方を択ることになる。

「正しい・正しくない」が問題ではなく、「使える・使えない」が問題だからである。

(6) 「東洋」

pp.72,73

奇妙なものだ。どんなに樹木が西欧の現実と西欧の全思考を支配してきたか。

……

東洋、とりわけオセアニアには、あらゆる点から見て樹木という西欧的モデルに対立するリゾーム的モデルのごときものがあるりはしないか？

西欧インテリの「東洋」幻想である。

自分のことを《「西欧」に疎外されている》と思う者は、「東洋」幻想をつくる。

(7) 「数学」

p.84

科学はしたい放題にさせておけば完全に狂ってしまう……
 数学を見るがいい、それらは科学なんかじゃなくて、驚異的な隠語。それもノマド的な隠語なのだ。

これも、「東洋」幻想の類の勘違いである。

そもそも、数学は、工学・科学に供する言語として開発されてきた言語である。

数学は、形式言語である。

文字（記号）、語生成規則、文生成規則、公理、推論規則を構え、ここから数学の生成が開始される。

数学の実質的な対象は、「数」のみである。——これは構成される。

「数」以外の対象は、「条件……を満たすもの」というふうを導入（定義）される。

数学に対して「形式の学」の言われ方がされるが、以上がこのことばの意味になるものである。

科学を「樹木状システム」の理由で退けたいのなら、「樹木状システム」の最たるものが数学である。

「それらは科学なんかじゃなくて、驚異的な隠語。それもノマド的な隠語なのだ」の言は、著者が己の浅はかを曝すしくじりである——ひとには気づかれずに済むかも知れぬが。

(8) 宣言

p.88

n人で、n マイナス 1 人で書くこと、スローガンの数々で書くこと——リゾームになり根にはなるな、断じて種を植えるな！
蒔くな、突き刺せ！

一にも多数多様にもなるな、多数多様体であれ！

線を作れ、決して点は作るな！

スピードは点を線に変容させる！速くあれ、たとえその場を動かねときでも！

シャンス線、アンシユの線、脱出線。

あなたの裡に將軍を目覚めさせるな！

地図を作れ、そして写真も素描も作るな！

ピンク・パンサーであれ、そしてあなたの愛もまた雀蜂と蘭、猫と狒狒のごとくであるように。

彼らは、自分自身つかめていないことを、スローガンに掲げる。

このスタンスに彼らはなぜ自足していただけるのか。

体質が革命屋だからである。

革命屋は、羅針盤をポーズし、これだけで大きな仕事をやっていると思う者である。

「自分は進路を示した、後は<人民>が中身を埋めるばかり」というわけである。

この宣言に応える / 応えられる者はいない。

荒唐無稽を言っているからである。

荒唐無稽は、うっちゃっておくのみである。

引用文献

G. Deleuze, F. Guattari (1976) : Rhizome

・豊崎光一 [訳] 「リゾーム」, 『エピステーメ』臨時増刊号, 1977

6.3.2 『リゾーム』の著者はどこを間違っているか

科学がする自然研究は、〈自己組織化する系〉を一つ画定してそれを研究する。

『リゾーム』の著者の表現を用いれば、リゾームを一つ画定してそれを研究する。

科学はそのリゾームを、『リゾーム』の著者の表現を用いれば「樹木の論理」で、理論化する。

科学は、つぎのようには思わない：

「リゾームには、リゾームの論理で！」

翻って、「リゾームには、リゾームの論理で！」を唱えるのが、『リゾーム』である。

しかし著者は、「リゾームの論理」(?) については何のアイデアももっていない。

『リゾーム』はジャーゴン満載であるが、これは思考停止をごまかそうとして、こうなるのである。

彼らは、子どもがだだをこねるふうに「樹木の論理」に反抗してみせるだけである。

「樹木の論理」は、進化の歴史の産物である。

この「進化」は、「論理の進化」, 「人の進化」, …… と系を溯って想うことになる「進化」である。

「樹木の論理」は、とってつけたものようにあるのではない。

「体制」も同じである。

現体制は、とってつけたものようにあるのではない。

『リゾーム』の著者は、革命屋である。

「樹木の論理」や体制が革命で変わることを夢想する。

この夢想ができるのは、「歴史」を思うことができないからである。

現前は、進化の歴史の^{はし}端である。

立体の面が物でないように、歴史の端である現前は物ではない。

《他の物と置き換える》というふうにはならない。

革命屋は、〈現前〉の存在論を間違えている者である。

現前を革命するとは、進化の歴史づくりから始めるということである。

彼らには、それがわからない。

7 革命屋自滅の公式 (1) : 自負心→孤独

7.1 自負→身内批判→孤立→見栄

7.2 例 :『シュールレアリスム宣言』(A. ブルトン)

7.1 自負→身内批判→孤立→見栄

7.1.1 不和・喧嘩別れ

7.1.2 引っ込みがつかない——大言壮語へ

7.1.3 孤立化を「裏切者を粛清」で合理化

7.1.4 <若者>を自分の味方に見立てる

7.1.1 不和・喧嘩別れ

革命屋は、<革命の理念に意気投合>のメカニズムで、グループを形成するようになる。

革命屋は、個々に自分を正義にしている。

一方、個は多様である。

考えることを行うことに、自ずと違いが出てくる。

このとき、自分を正義にしている者は、自分とは違うように考え・行う者を、正義を修正する者（「修正主義者」）と見てしまう。

そこで、相手を自分のようにすることを目的にした「批判」を行う。

批判される者は、自分を正義にしている者であるから、批判には批判を返す。

批判は批判の応酬になり、相手の人格攻撃にまで進む。

この結果は、グループの内部分裂である。

分派ができ、またグループを脱退する者が出てくる。

この対立は、相手の人格否定になっているので、様相は深刻になる。

お定まりは、内に対しては「粛清」、脱退者には「テロ」、である。

グループは、こうして自壊・自滅していく。

7.1.2 引っ込みがつかない——大言壮語へ

(作成予定)

7.1.3 孤立化を「裏切者を粛清」で合理化

革命屋の言う〈世直し〉は、虚言である。

しかし、初めて聞く者は、これをインテリジェンスと受け取る。
これについて行けないような自分はダメだ、と思う。

虚言は、いつまでもひとを騙せない。

ひとは、だんだんと「なんだか変だ」「いかさまじゃないか？」と思うようになる。

革命屋はこれに対し、「わたしの言うことがわからない愚か者がいる」をキャンペーンする。

そして、大言壮語にますます拍車をかけていく。

この結果は、《これまでシンパだった者たちが、愛想尽かしをして離れていく》である。

革命屋は自惚れの者であるから、〈愛想尽かしされた者〉としてひとから見られることは堪えられないことである。

そこで先回りして、自分から離れていった者たちを「わたしは彼らを粛清した」と世間に曝すことをやる。

彼らの人格を否定する文を、執拗にメディアに載せる。

この結果は、《自分のお眼鏡にかなうような者は、いない》である。

しかし革命屋は自惚れの者であるから、自分を〈独り善がりのひとりぼっち〉と認めるのは堪えられないことである。

そこで、「精神のまっとうな者・有能な者なら自分に賛同する」を想い、「彼らは匿名で世の中に遍在している」を唱える。

7.1.4 <若者>を自分の味方に見立てる

革命屋は群れたがるが、群れば相手にがまんできなくなり、結局また独りになる。

独りになった革命屋は、自分をつぎのように合理化する：

「自分のほかは、裏切り者」

「革命を身に負える者は、少数」

ここで革命屋は、「裏切り」をつぎのように考える：

「狡さが人を裏切り者にしていく」

「人を狡くするものは、社会」

翻って、社会にまだ染まっていない<若者>は、<狡くない者>である。

こうして革命屋は、つぎのように己を慰撫する：

「自分には、潜在的に若者がついている」

「自分は、ぜんぜん独りではない」

若者は、革命に利用されるのがお定まりである。

それは、<もとより革命の側につく者>と見込まれるからである。

革命屋とは、「純真であることは、革命(自分)の側につくこと」と思い上がる者である。

7.2 例：『シュールレアリズム宣言』 (A. ブルトン)

7.2.1 「第一宣言」(1924, 28 才)

7.2.2 「第二宣言」(1930, 34 才)

7.2.3 「第三宣言のための序論」(1942, 46 才)

7.2.1 「第一宣言」(1924, 28才)

『シュールレアリズム宣言』, pp.15,16

今日、私は、ある一つの城のことを考えている。
 その城は、まだその半ばが廃墟になっているわけではない。
 その城は私のもので、パリからさほど遠くない、荒涼とした眺望のなかにたっている。
 城のさまざまな付属物は、まだそのまま保たれている。
 ただ内部だけは、居心地のよさという点で必要とされるものは、何ひとつ残さないように、徹底的に作りかえられている。
 自動車は、樹木の影になっている門のところにとまる。

私の友達の何人かが、ここに居をかまえた。
 ルイ・アラゴンが、いま出かけようとしている。
 彼には、ちょっと挨拶するだけの時間しかない。
 フィリップ・スーポーは、星の出るころになって起きてくる。
 ポール・エリュアール、われらの偉大なエリュアールは、まだ外出先から戻っていない。
 向うの庭園で、ロベール・デスノスとロジェ・ヴイトラックとが、決闘にかんする昔の法令の文書を判読している。
 ジョルジュ・オーリックやジャン・ポーランもいる。
 マックス・モリーズは上手に舟を漕ぎ、バンジャマン・ペレは鳥の方程式をとくことに夢中だ。
 ジョゼフ・デルテイユやジャン・カリーヴがいる。
 それからジョルジュ・ランブール、ジョルジュ・ランブール(そこいら中に、ジョルジュ・ランブールの人垣が張りめぐらされている)。

マルセル・ノルもいる。
 T・フレンケルは、繫留気球の上から、こちらに合図している。
 ジョルジュ・マルキーヌ、アントナン・アルトー、フランシス・ジェラルド、ピエール・ナヴィール、J・A・ボワファール、それから誠実な美男子のジャック・バロンとその弟、その他おおぜいの青年や魅力にあふれた御婦人がたがっている。

これらの青年たちは、何ものをも拒もうとしない。
 彼らの欲望が、そのまま資産なのであり、彼らは欲望のおもむくままに行動するのだ。
 フランシス・ピカビヤがわれわれに会いにきてくれたし、また先週は、今まで誰も知らなかったマルセル・デュシャンという男を、鏡の間で招待した。

引用文献

Breton, André : Les manifestes du surréalisme suivis de prolégomènes a un troisième manifeste du surréalisme ou non (1924-1942)

・稲田三吉 [訳] 『シュールレアリズム宣言』, 現代思潮社, 1961

7.2.2 「第二宣言」(1930, 34才)

「第1宣言」で同志に持ち上げられた者たちは、「第2宣言」において「低能・裏切り者」として曝される：

『シュールレアリスム宣言』, pp.58-60

例えばアルトー氏は、その現場を人に見られたように、あるいは実際に見なくとも十分ありそうなことだと人に信じられるように、あるホテルの廊下でピエール・ユニックに横っつらをはられ、母に助けてくれと泣きついたことがあるのだ。

またカリーヴ氏は、政治的な問題や性的な問題を、抜け目のないテロリズムの角度からだけしか見ることのできない、要するにマルロー氏のあのガリンのような弁明者にすぎないのだ。

またデルテイユ氏については、(ナヴィールの編集による)『シュールレアリスム革命』誌第二号にのった彼の愛情についての下劣な記事を見れば十分であろう。

その後シュールレアリスムから彼が除名されたことや、彼の作品『勇士』『ジャンヌ・ダルク』などについては、もう説明する必要もあるまい。

ジェラルド氏は彼なりのやり方で、ただ一人、先天的な低能の故に除名された。

デルテイユ氏の場合とはまた違った変わりようで、現在『階級闘争』『真実』誌などで、こまごました仕事をしている。いずれもたいしたことはないが。

ランブル氏も同じように、ほとんどわれわれのそばから姿を消してしまった。

彼のばあいは懐疑的であることと、語のもっとも悪い意味での文学的コケットリーが目立っていた。

マッソン氏の場合は、ひどく誇示された彼のシュールレアリストとしての信念が、『シュールレアリスムと絵画』と題された書物を読むことによって、もう我慢ができなくなったのだ。

この書物のなかで著者は、画家たちの階級などということには全く意をはらわず、マッソン氏が悪党と見なしているピカソよりも彼のほうを、またマッソン氏が自分よりも絵のかきかたが下手だという唯それだけの理由で非難しているマックス・エルソストよりも彼のほうを、それぞれ上位に置くべきだ、などとは思わなかったし、また上位に置くことが出来るとも思わなかったからである。

ピカソやエルンストについての彼のこの言葉は、マッソン氏自身の口から私が聞いたものである。

スーポー氏のばあいは、彼とともにあらゆる汚辱がついてまわっている。

彼が自分の名をあげて書いているものについては語るまい。

彼が匿名で書いているもの、たとえば彼が猫イラズの周りをぐるぐるまわっているネズミのようないら立ちで、しきりと自己を弁明しながら、『立ち聞き』といったような脅喝専門の新聞に書いている、……

最後にヴィトラック氏だが、彼こそは本物の思想をけがす者で——「純粹詩」などというものは、ブレモン師という油虫野郎

と彼とにまかせておこう——この哀れな男の如何なる試練にもたえうる無邪気さは、自分の理想は演劇人である以上、もちろんアルトー氏の理想とおなじく、美しさという点にかけては警官の一斉検挙にも匹敵しうほど見事なスペクタクルを作り出すことにある(『N・R・F』誌上に発表されたアルフレアド・ジャリ劇場の宣言)とまで告白したほどであった。……

見られるとおり、これらはかなり滑稽なことである。

だが、まだいるのだ。

その他の者は、彼らの公然たる活動があまりにも取るにたらぬものであったり、彼らの常習的な詐欺がさほど一般的でない分野で行われたり、また彼らが詩語によって難場を切りぬけようとしたりしたため、ここにあげた罪状列挙のなかには入らなかったものである。

同上, pp.70-72

ナヴィール氏が、フランス共産党やロシア共産党や、あらゆる国の、それも対立する立場にある人の大部分のところへ出かけていき、しかもそれらのうちで第一級の人物で、借金の申し込みができそうだと思う人のところには片っぱしから出かけていったのを見るだけで十分であろう。……『詩的態度』という作品を書いたバロン氏は、そんな風な態度をとっていたが、ナヴィール氏のほうは革命家らしい態度を見せかけていたのだ。

共産党での三カ月の実地見習だ、とナヴィール氏は思っていたのだろう。

じつにうぬぼれの強い人である。……

ナヴィール氏という人は、少なくともナヴィール氏の父親は、非常な金持である。

(この書物を読んでいる読者のうちで、絵画的なものに敵意をもっていない人々のためにつけくわえて説明するが、『階級闘争』誌の編集事務所はグルネル街15番地のナヴィール氏の自宅にあるのだが、その自宅は実は、むかしのラ・ロッシュフーコー公爵家の館なのである。)

このような考察をすることに、私は以前ほど無関心ではなくなった。

例えばモランジュ氏が『マルクス主義雑誌』の創刊を企てた時、彼がこのためにフリードマン氏から500万フランの出資を受けたことに私は注目している。

ルーレットの賭における彼の不運は、たしかに彼をしてそれだけの金額の大部分を、その直後につぐなわざるを得なくさせたが、そのことも結局たいしたマイナスとはならず、彼はこの法外な経済的援助のおかげで、人も知るごとく現在の地位を手に入れることができ、またその立場における彼の世間周知の無能力さをも見のがさせることに成功しているのである。

……

彼らをこんなふうには世に曝すのは、指導者は自分だということを示そうとするためである。

自分が彼らから愛想尽かしされたというふうに世間に思われまいよう、自分が彼らを粛清したのだという格好を先回りしてつくり出すというのである：

同上, pp.72,73

これらの問題について十分に時間をかけて意見をのべたほうがいいと私が考えたのは、まず第一に、むかしわれわれに協力してくれた人たちのうちで、現在すっかりシュールレアリスムの迷いがさめたと思っている人々は、ただ一人の例外もなく、すべてわれわれによってシュールレアリスムから除名された人々だということを、はっきり意思表示するためである。従って、いかなる理由でそうなったかを世間に知ってもらうことは、あながち無益ではなかったと思う。

粛清をさせるものは、嫉妬である。

そして嫉妬は、粛清をつぎのように合理化する：

同上, p.60

こうした註釈をこれ以上長くつづけることはやめるべきだと私に要求するのは、すこし言いすぎであろう。

私の方法の範囲内では、こうした卑劣な人々や真似をする人、出世主義者、いつわりの証人、そして警察のスパイなどを勝手に泳がせておくことは、許されてはならないことだ。

彼らを打ちやぶり得る時がくるまで待つあいだに失われる時間は、まだとりかえされるし、彼らを攻撃することによってのみ取りかえし得るだろう。

私はこうした非常に正確な区別だけが、われわれの今もとめている目的に完全にふさわしいことだと考えるし、

またこうした裏切者たちがわれわれの間にとどまりつづけるこ

との破壊的な効力を、実際以上に低く見つめることには、ある不思議な理性のくもりが認められるし、それと同様、もはや小手しらべぐらいのことしか出来ないぐらいに成りさがってしまったこれらの裏切者が、このような制裁に無感覚でありつづけようと想像することには、実利主義的な性格のもっとも歎かわしい錯覚があるように思う。

粛清の果ては、自分独りになることである。

独りぼっちになった者は、「少数精鋭主義」を立てて自分を保つ。

同上, p.54

ただ注目すべきことは、かつての或る日われわれをしてやむなく彼らなしでござざるを得ないようにしむけた人々が、ひとたび彼ら自身に、彼らだけにゆだねられると、たちまちにして、どうしたら難局を切りぬけられるのか分からなくなってしまい、ひどく哀れな窮余の策にもすがらざるをえなくなって、ついには秩序の擁護者や、頭脳による平等化の偉大な信奉者たちすべての寵愛をとりもどそうと努めるようになることだ。

それは、シュールレアリスムへの参加の誓いに遺漏なく従うことが、ごく少数の人だけが時のたつにつれて初めてそれをなし得ることを示していくような、危険への無関心と蔑視、そして妥協の拒否を要求するからである。

同上, p.60

いずれも、われこそはと姿を見せる人々のうちで、シュールレ

アリスムが意図するもの的高みにまで達しうるものは実にわずかな人々にすぎないこと、また、才能の衰えがすこしでも見えしだい、たちまち裁かれて、引きかえすすべもなく彼らを破滅のほうへ急がせるという事実が、たとえ残る者のほうが脱落する者よりも遥かに少ないにせよ、結局はシュールレアリスムのこの意図にとってプラスになるということ、彼ら〔自分が粛清した者たち〕のおかげでわれわれは立証しえたとし納得することもできたので、ある。

そして、《自分の理論は、わかる者たちにはつねに支持され続け、そしてやがて実を結ぶだろう》の妄想で、己を慰撫するのである：

同上, p.54

……シュールレアリスムの立場は、たとえ十分に知られていてもなお、それが如何なる妥協をも許さぬものである点を知ってもらわねばならない。……われわれは、たとえそれがどのような形をとろうとも、詩的な無関心、芸術的な気ばらし、博学な探求、純粋な思弁、そうしたものはすべて戦う。またわれわれは、卑小な人にせよ偉大な人にせよ精神をつかうことを節約するような人々とは、何ひとつ共通なものは持ちたくないと思う。たとえ可能なかぎりのすべての緩和、すべての放棄、すべての裏切りがあろうとも、われわれはやはり、どこまでもそうした馬鹿げたこととは絶縁しつづけるだろう。

同上, pp.54,55

初めのうちは率先して自己の意義ある機会や真実への欲望とシュールレアリスムとを釣合わせようとしたすべての人々のうちで、たとえ唯の一人も残らなくなったとしても、それでもシュールレアリスムは生きつづけるにちがいない。

同上, pp.57,58

だが現在のこの瞬間にも、世界じゅう到る所で、高等中学校で、また工場においてさえ(原註)、また街頭や神学校や兵営において、安易さを拒否しようとする純粋な若者たちがまだいるのだ。

そうした若者たちだけを私は相手にしているのであり、彼らだけのために私は、結局はありふれた知的な気ばらしにすぎないという非難から、シュールレアリスムを弁明しようとして企てているのである。

そうした若者たちが、いわれのない偏見をすてて、いったいわれわれが何を作ろうとしていたかを知ろうと努め、またわれわれを助けてくれ、そしてその必要があれば、一人ひとりわれわれと交代してくれることを私は切望する。

引用文献

Breton, André : Les manifestes du surréalisme suivis de prolégomènes a un troisième manifeste du surréalisme ou non (1924-1942)

・稲田三吉 [訳] 『シュールレアリスム宣言』, 現代思潮社, 1961

7.2.3 「第三宣言のための序論」(1942, 46才)

他の者を「粛清」で曝し、自分独りになる。

この者は、ものを言えば負け惜しみを言う体になる。

「第3宣言のための序論」は、これである：

『シュールレアリズム宣言』, p.122

…… 真実というものが、腹のなかでせせら笑う場合にのみ姿を見せるだけで、けっしてとらえられることのない、あの歴史的過程を考慮しつつ、私は少なくとも、**たえず更新され、また挺の役目をはたしてくれるあの少数派の人々のために**、私自身の意見をのべておくべきだと思う。

つまり、私の最大の野心は、**私の死後も無限に伝達**することのできる理論的な意味を残してゆくということである。

引用文献

Breton, André : Les manifestes du surréalisme suivis de prolégomènes a un troisième manifeste du surréalisme ou non (1924-1942)

・稲田三吉 [訳] 『シュールレアリズム宣言』, 現代思潮社, 1961

8 革命屋自滅の公式 (2) : 真面目→消亡

8.0 要旨

8.1 例 : 島崎藤村『夜明け前』

8.0 要旨

革命屋は、自分を「リーダー」として集団のてっぺんに描く者と、「一兵卒」として集団の中に描く者の二タイプに分かれる。
また、この二タイプは、精神主義の二タイプになる。
前者は「自負心」で、後者は「真面目」である。

革命屋のこの二タイプに応じて、革命屋の自滅も、リーダー/自負心型自滅と一兵卒/真面目型自滅の二タイプになる。

リーダー/自負心は、革命が成らないことを、周りの者の無能のせいにする。

そして、孤高をパフォーマンスする。

リーダー/自負心型自滅の形は<孤独>である。

一兵卒/真面目は、革命が成らないことを誰かのせいにする事ができない。

ひとり悶々とすることになる。

悶々は、精神を病ませ、自分を壊していく。

こうして、一兵卒/真面目型自滅の形は<消亡>である。

リーダー/自負心の自滅型である<孤独>は、具体例を A.ブルトン『シュールレアリズム宣言』のブルトン自身に見ることができる。

一兵卒/真面目の自滅型である<消亡>は、具体例を島崎藤村『夜明け前』の主人公青山半蔵に見ることができる。

8.1 例：島崎藤村『夜明け前』

(作成予定)

おわりに

この論考は、最後まで構成が定まらなかった。
実際、この論考は、結果的にこんなものが出来上がったというものである。

そもそも端緒は、昔の本を捨てるのうちの『シュールレアリズム宣言 / A. ブルトン』（現代思潮社）を捨てるであった。
捨てる前に、内容をメモっておこうと思ったのである。
いま改めて見て内容は読むに堪えないものであったが、この場合「読むに堪えない」の意味を押さえることが思想になると思い、数か所を引用する格好で論考をつくった（引用も論考である ^^）。

しかしいつものことだが、一つの論考をサーバーの中に収めようとする
と、フレームもつくらねばならない。
そしてこの作業をすると、最初の主題があちこちに広がっていくことになる。
結果として、はじめには思いもよらなかった格好のものが、現れてくる
のである。

そしてこの作業は、時期的に「新型コロナ」と重なることになった。
世の中は、ウィルスの荒唐無稽な存在論が流布し、「自粛」戦争と「マスク」
全体主義の体制になった。
戦争・全体主義はこんなに簡単に成るものなのだということを、リアル
タイムに目撃することになったのである。

おわりに

かくして本論考は、「全体主義」の論考とすることで現前を参照できるものになった。

実際、「マスク」全体主義の個人レベルは「正義感」である。荒唐無稽な存在論が狂気の正義感を形成し、全体主義が現れる——そのシーンがそこにリアルにある。

ただしここしばらくは、「新型コロナ」の論考（『[「新型コロナ」：洗脳・全体主義](#)』）が先になってしまい、本論考の「全体主義」の論考は薄っぺらなままになっている。

また『「新型コロナ」……』からすると、本論考『精神主義のしくみ』と重なったことで、ずいぶんと後手を引いてしまったうらみがある。——3月くらいには済ませておくべき内容を、4、5月まで持ち越すことになってしまった。

と、なんだかんだであちこち穴のあいた論考であるが、要旨はだいたい埋めたということにして、ここで一回切りとする。

2020-06-02

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て北海道教育大学教育学部教授(数学教育専門), 2015年退職。

註：本論考は、つぎのサイトで継続される(これの進行に応じて本書を適宜更新する)：

<http://m-ac.jp/thought/reformation/mind/>

精神主義のしくみ

2020-07-14 初版アップロード (サーバー：m-ac.jp)

著者・サーバ運営者 宮下英明

サーバ m-ac.jp

<http://m-ac.jp/>

m@m-ac.jp
